

京	都	府
<p>1・15～2・11 朝日美術展、京都美術館に開催（菊池契月・西山翠嶂らの作品も展示、朝日新聞社賞には武藤章「桜」・北沢映月「冬眠」・奥村厚一「初冬晴日」・沢宏毅「少年」・海老名正夫「田の女」の5点が選ばれる）。市美術館と美術品</p> <p>2・2 黒田重太郎、京都博物館事務所における京都市文化課主催の講演会で「京都洋画の黎明期」の題で講演。<span style="float:right">京都洋画の黎明期</span></p> <p>2・5 京都美術クラブ解散のあと、新たに京都美術懇話会結成（同会は、日展の特選・京展の市長賞2回受賞者、在野団体の会友級以上の在京美術家の親睦団体。太田喜二郎・植田寿蔵京大教授・中川宗太郎美術専校長らを発起人とし、106人が創立員に加わる）。<span style="float:right">日本美術年鑑 昭22-26</span></p> <p>3・1～31 第1回日展開催<sup>(1)</sup>（予定通り開催された日展は延期説・改組等で一時混乱し、開会延期要求を提出した京都日本画作家らは、材料・期日の不足を理由に出品せず）。<span style="float:right">京都 2・7、日本美術年鑑 昭22-26</span></p> <p>3・29 アメリカ占領軍、京都美術館の事務所を除く全敷地・建物を接収（朝鮮事変勃発により野戦病院となる）。<span style="float:right">市美術館年報 昭40、毎日 昭27・3・12</span></p> <p>3・一 京都独立美術クラブ創立（京都在住の独立展関係者の集まった会で、独立美術京都研究所が発展的解消したもの。事務所：中京区西ノ京中御門町42、今井憲一方、顧問：須田国太郎、会員：竹中三郎・今井憲一ら26名）。<span style="float:right">日本美術年鑑 昭19-21</span></p> <p>3・一 日本染織図案家連盟結成。<span style="float:right">図案年鑑 1</span></p> <p>4・一 純正日本彫刻美術院創立（「古代ヨリノ純日本的作品ヲ対象トシテ之ガ研究模刻ヲナス」ことを目標とする。院長：松田尚之、会員：矢野判三・田中源三・清水礼四郎・藤庭賢一ら）。<span style="float:right">同趣意書</span></p> <p>5・一 北協昇、美術文化研究会を自宅に設立。<span style="float:right">日本の前衛絵画</span></p> <p>5・一 稲垣稔次郎、交歓協会理事となり「松の図屏風」をアメリカ軍人に寄贈。<span style="float:right">稲垣稔次郎作品集</span></p> <p>5・一 稲垣稔次郎、国画会を退会（昭22・1新匠工芸会発足に当り会員となる）。<span style="float:right">同上</span></p> <p>5・一 日本南画院創立（松村桂月・小室翠雲・水田竹圃ら東西の南画家が天竜寺に集まり、新南画の創造を宣言）。<span style="float:right">京都画壇</span></p> <p>5・一 反日展で一致した京都画壇、移動鑑査を文部省に陳情（名古屋以西の作品は京都に集めて本鑑査をうけ、入選した作品は役所の負担で東</p>	<p>京に運び審査をうけるといふもの、文部省は無視）。<span style="float:right">同上</span></p> <p>8・1 京都府陶工職業補導所、五条通西大谷前白糸町の京都府陶磁器工業協同組合の建物を借用し設立（清水焼振興と失業対策が当初の目的、成形科定員30名で発足）。<span style="float:right">告示 444号、同所事業概要 昭45</span></p> <p>9・18 洋画家 田中善之助没（明22・12・1京都生、享年58）。<span style="float:right">日本美術年鑑 昭22-26</span></p> <p>10・9 富本憲吉、帝国芸術院会員を辞任、京都に移り、松風工場で輸出食器の研究顧問となり、また福田松齋窯でも作陶する。<span style="float:right">日本芸術院史、富本憲吉遺作展目録</span></p> <p>10・一 京都市工芸図案展開催（その結果、京都市工芸図案協会設立、以後毎年展覧会を開く）。<span style="float:right">図案年鑑 1</span></p> <p>10・一 二条城黒書院の壁画修復作業開始（戦時中破壊をおそれ疎開していた壁画の全面的復旧作業を、画家入江波光の指導で開始）。<span style="float:right">京都 10-25</span></p> <p>12・一 富本憲吉、民芸派の参加に不満をいだいて国画会工芸部を退会。<span style="float:right">富本憲吉遺作展目録</span></p> <p><b>この年</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▷ 京都陶磁器工業統制組合解散。<span style="float:right">京焼百年の歩み</span></li> <li>▷ 独立美術協会の京都研究所再開（須田国太郎が再開に努力し以前同様実技を指導）。<span style="float:right">須田国太郎</span></li> <li>▷ 朝日画廊（京都朝日会館内）開設。（会場費は無料、京都美術懇話会が運営の責任にあたり百回をこえる展覧をつづけたが、2年半で経営難に陥り、会員寄贈作品展を最後に昭24・5・3閉鎖）。<span style="float:right">京都画壇、日本美術工芸 128</span></li> <li>▷ 洋画家 加藤源之助没（明13生）。<span style="float:right">京都洋画の黎明期</span></li> <li>▷ 京都府陶磁器工業協同組合発足。<span style="float:right">京焼百年の歩み</span></li> <li>▷ 日展の登竜門化する京展の運営をめぐり、特選級の若手日本画家の間から改革の声が上がる（西山英雄・向井久万・沢宏毅・奥村厚一・菊池隆志らが組織する土曜会では、審査員は全出品者の投票によって公選すること、審査を公開すること。鑑賞者賞を設けることなどを内容とした京展改革案をまとめて、画家協会の役員会に提出、作家のための展覧会を要望、しかし美術界の保守主義は強く、若手画家がイニシアティブをとった京展改革は挫折する）。<span style="float:right">京都画壇</span></li> <li>▷ 青竜社展、大丸に開催（川端竜子の主宰する青竜社は、この年から官展の本拠京都に進出、昭41まで京都展を大丸に春秋2回開催する）。<span style="float:right">同上</span></li> </ul>	

参	考	日	本
(1)第1回日展特選受賞者（京都関係のみ）	<p>絵画 木村広吉「静雪」、森戸国次「朝」</p> <p>美術工芸 稲垣稔次郎「松之図糊絵屏風」、中島清「白磁牡丹図花瓶」<span style="float:right">日本芸術院史</span></p>	1・19	洋画家 巽光没（明40生、享年40）。 1・一 文部省に文化課、芸術課設置。 3・1～31 文部省主催第1回日本美術展（日展）、都美術館に開催（安井「安倍先生像」など）。 10・16～11・20 第2回展（無鑑査廃止、審査員公選、新制作派、独立美術協会など不参加、伊東「銀河祭り」など）。 3・一 二科会・理論部（北園克衛・植村鷹千代・鈴木崧、のちに菊岡久利ら）、工芸部（千宗室・勅使河原蒼風・山脇巖ら）を新設。 3・一 帝室博物館再開。 3・一 今関啓司没（享年54）。 4・11 米人 日本美術研究家 ラングトン=ウォーナー、G. H. Q顧問として来日（～8・17）、古美術保護公開政策に助言。 4・一 谷協素文没（享年69）。 4・一 牧野虎雄主宰の旧旺玄社、再組織され旺玄会として再建。 4・一 美術界の民主化をめざして、内田巖・裕伊之助・福田豊四郎・本郷新ら日本美術会を結成。昭22から毎年アンデパンダン展を開く。 5・一 旧プロレタリア美術作家同盟の作家11名、現実会を結成、第1回展を開く。 7・一 武井武雄・初山滋・村山知義ら、日本童画会を結成。 8・一 戦時中『生活美術』と改称され中断していた雑誌『アトリエ』復刊。 9・一 戦時中、『美術』と改題されていた『みづゑ』復刊。 9・一 二科展、院展、新制作派展、一水会展など復活。 9・一 日本画専門の月刊誌『三彩』、美術出版社から創刊。 10・一 山本鼎（享年65）、牧野虎雄（享年57）没。 11・一 三岸節子・佐伯米子・仲田好江・森田元子らを中心に女流画家協会結成、昭22・7 自由出品制による第1回女流画家協会展を都美術館に開催。
(2)第2回日展特選受賞者（京都関係のみ）	<p>絵画 後藤貞之介「嵯峨野」、広田多津「浴み」、池田栄広「寒菊」、奥村厚一「浄晨」</p> <p>美術工芸 佐野猛夫「藤纏屏風童女の図」、浅見隆三「（象嵌）干柿ノ図皿」<span style="float:right">日本芸術院史</span></p>		

京	都	府
<p>1・1 新匠工芸会創立（富本憲吉ら旧国画会工芸部会員に山脇洋二・小合友之助が加わり新たな立場から組織、事務所右京区川島北裏町57稲垣稔次郎方、会員(陶)近藤悠三・富本憲吉・鈴木清ら、(染)稲垣稔次郎・河合隆三・暮田延美、(漆)山永光甫・古山英司、(金)増田三男、昭26新匠会と改め、昭27在野団体として新発足。 <small>日本美術年鑑 昭22-26、29</small></p> <p>1・19 日本画家 前田荻邨没（明28兵庫県生、享年53）。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>2・1 青年作陶家集団創立<sup>(2)</sup>（同人は中島清を中心に伊東奎・山田光・八木一夫ら10人、走泥社の前身）。 <small>同趣意書、日本美術工芸 350</small></p> <p>2・2 日本美術工芸交驛協会（室町四条下ル、昭20・10 設立）、工房を完成し、初窯入式挙行。 <small>京都 2・6</small></p> <p>2・3 京都美術協会、新聞会館に結成式を挙行（会長：木村知事、副会長：府経済部長 小野竹喬）。 <small>京都 1・25、2・4</small></p> <p>2・12 京都八幡町の石清水八幡宮出火、同社所蔵の国宝御鎮座縁起絵巻をはじめ多くの美術品宝物などを焼失。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>2・28 西陣織物工業協同組合設立（西陣織物統制組合は解消）。 <small>西陣織物館記</small></p> <p>2・1 第1回美術文化協会展、大丸に開催。 <small>日本の前衛絵画</small></p> <p>2・1 無厭会創立（東山区五条橋東6丁目、山崎光洋方。清水焼作家20名によって結成、会員は河合瑞豊・河合栄之助・米沢蘇峰・高橋道八・大丸北峰・宇野仁松・久世久実・山崎光洋・近藤悠三・浅見五郎助・赤沢露石・清水六和・清水六兵衛・三浦竹泉・宮川香齋・七兵衛信翠・新開邦太郎・永楽善五郎・森野嘉光・諏訪蘇山）。 <small>日本美術年鑑 昭29</small></p> <p>3・17 帝国芸術院総会で新会員を推薦決定、第1部に小野竹喬・須田国太郎ら選ばれる。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>3・25 日本画家 石崎光瑠没（明17富山県生、享年64）。 <small>同上</small></p> <p>4・1 市立美術専門学校、洋画科・彫刻科を新設（また図案科を廃し工芸科とし、工芸図案部を設置）。 <small>同窓会名簿 1961</small></p> <p>4・1 太田喜二郎、市立美術専門学校教授となる。 <small>太田喜二郎遺作展図集</small></p> <p>5・17 東山七条の智積院焼失（国宝の襖絵は焼失を免れたが、本堂・寝殿その他の建物と共に一部の床貼付等を焼く）。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>5・1 第1回青年作陶家集団展、朝日ビル画廊に開催（10月、第2回展開催、昭23・7 走泥社創立とともに解消）。 <small>日本美術工芸 350</small></p> <p>6・1 第1回新匠工芸会展、高島屋に開催。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>7・12 京都美術工芸総合研究委員会設立準備打合会を、京都商工会議所に開催（美術工芸の発達とその輸出振興を図るのが目的）。 <small>京都 7・13</small></p>	<p>8・4 楠部弥弼・皆川月華ら陶芸・染織・漆芸・金工各部作家 25 名、京展改革案を市に提出（改革案は顧問・評議員を解消し、美術審議委員を設け、京展入選者を投票で決めるなど）。 <small>京都 8・5</small></p> <p>8・1 西山翠嶂「日展改革私案」を発表（審査員制度をやめて、団体の連立展にせよというこれまでの官展のやり方を全面的に否定した改革案）。 <small>京都画壇</small></p> <p>9・14 日本画家 中村大三郎没（明31、京都生）。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>9・1 京都から北脇昇・小牧源太郎、日本アヴァンギャルド美術家クラブ結成に加わる。 <small>日本の前衛絵画</small></p> <p>11・1 陶芸団体 四耕会創立（宇野三吾をリーダーとする）。 <small>日本美術工芸 350</small></p> <p>12・1 北脇昇ら、勤労者美術との相互浸透の組織である京都新美術人協会を結成（須田国太郎・菊池一雄・中井宗太郎ら参加）。日本の前衛絵画</p> <p><b>この年</b></p> <p>▷ 京都府工芸美術総合研究所設立（これは既存の試験所・研究所などの設備を活用し、予算を与えて各業界に実際的な研究を依頼、陶磁器では、原材料の改良、輸出陶磁器の図案の作製などを実施）。 <small>京焼百年の歩み</small></p> <p>▷ 6代清水六兵衛、唐三彩釉を研究完成し、三彩流湖と命銘。 <small>清水六兵衛歴代作品集</small></p> <p>▷ 国盛義篤、市立美術専門学校助教となる。</p> <p>▷ 京都彫塑家協会結成（元日展審査員松田尚之・新制作派会員菊池一雄ら彫刻家28名が、京都彫刻界の発展を期して結成）。 <small>京都年鑑 昭28、京都 昭23・11・11</small></p> <p>▷ 日展、京都鑑査も実施され、京都の大家の出品も多く、はじめて官展らしいにぎわいをみせたが、これが最後の官展となる。 <small>京都画壇</small></p> <p>▷ 菊池契月、法輪寺多宝塔天井画「竜」を完成。 <small>日本美術年鑑 昭31</small></p> <p>▷ 市文化課の主唱で、書道・文人画・篆刻の3部門各派が結集して文人連盟誕生（昭22、23 は市主催、以後は同連盟の主催で毎年秋催され、既存の平安書道会展とともに秋の書道会をにぎわす）。 <small>日本美術年鑑 昭26</small></p> <p>▷ 独立美術協会京都研究所再開（須田国太郎ら指導）。 <small>須田国太郎</small></p> <p>▷ 市民有志により市民美術展開設（昭31・第10回展から市主催となる。アマチュア美術家を対象）。 <small>市美術館年報 昭39</small></p> <p><b>この年ごろ</b></p> <p>▷ 彫刻家 佐藤玄々、花園妙心寺塔頭大心院に定住。 <small>近代作家の回顧展目録</small></p>	

参	考	日	本
(1)第3回日展特選受賞者（京都関係のみ）	<p>絵画 西山英雄「比良薄暮」、谷口英雄「春堤」、河合健二「霧雨」、梶原緋佐子「晩涼」、浜田観「芥子」、田代正子「調音」</p> <p>美術工芸 岡田章人「均霽雪柳之図手筈」 <small>日本芸術院史</small></p>	<p>1・1 浜田光葆没（享年62）。</p> <p>3・10～30 泰西名画展、読売新聞社主催、都美術館に開催。ルノワール、セザンヌ、ゴーガンなど。</p> <p>3・20 職場美術協議会結成、6・16～30第1回職場美術展、都美術館に開催。</p> <p>3・1 大河内信・川端実・朝井関右衛門・鈴木栄二郎・黒田頼綱・山口猛彦・伊藤梯三・南政善・須田剋太・井手宣通ら光風会の若手ら、新樹会を結成、6月に第1回展を開催。</p> <p>3・1 春陽会、日展不参加を声明。</p> <p>3・1 小野竹喬・中村岳陵・須田国太郎・豊道慶中、芸術院会員となる。</p> <p>4・1 旧二科会員の正宗得三郎・能谷守一・黒田重太郎・中川紀元・鍋井克之・宮本三郎・栗原信・田村孝之介ら、第二紀会を創立、9月第1回展を開催。</p> <p>4・1 丸木位里・赤松俊子・井手則雄ら前衛美術会を結成、第1回展を開く。</p> <p>5・1～20 現代美術(総合)展、朝日新聞社、東京都共催にて都美術館に開催。(大観「大和心」・藤田「私の夢」・本郷新「青年」など)。</p> <p>5・1 北野恒富没（享年68）、野口謙次郎没（享年50）。</p> <p>5・1 本間美術館（酒田市）開館。</p> <p>6・10～30 第1回美術団体連合展、毎日新聞社主催にて都美術館に開催（日展系および在野系の洋画12団体、一水会・二科会・東光会・独立美術協会・旺玄会・創元会・現実会・光風会・国画会・自由美術家協会・春陽会・新制作派協会・美術文化協会が参加）。</p> <p>6・1 今西中通没（享年40）。</p> <p>7・1 近代日本洋画展、国立博物館主催にて同館に開催（明治以降の物故洋画家の作品を時代的に回顧）。</p> <p>7・1 日本彫刻家連盟結成。</p> <p>8・1 国画会・二科会、日展不参加を声明。</p> <p>9・1 日展の有力団体である一水会も日展不参加を決定。日展審査員の決定にさいし、団体間の選挙運動が激しく、これに対する強い非難が起る。</p> <p>9・1 日本アヴァンギャルド美術家クラブ結成、翌23・2 第1回モダンアート展を開催。</p> <p>9・1 清水澄（享年80）、安田半圃没（享年59）。</p> <p>10・16～11・20 第3回日展、都美術館に開催（神泉「赤松」、伊藤深水「鏡」、森田元子「想い」・春陽会・国画会・二科会など不参加）。</p> <p>10・22 松方コレクションの一部、パリで競売になる（モネ「太陽と柳」・「しだれ柳」）。</p> <p>10・1 関野聖雲没。</p> <p>11・1 石川寅治・鶴田吾郎ら、太平洋画会から分れて示現会を結成。翌23・1 第1回展を開催。</p> <p>12・4 帝国芸術院、日本芸術院と改称。</p> <p>12・9～18 第1回日本アンデパンダン展（日本美術会主催、都美術館に開催、自由出品制）。</p>	

京	都	府
<p>1・1～8 京都美術懇話会小品展、朝日画廊に開催（日本画：向井久万・秋野不矩・堀井香坡、洋画：今井憲一・伊藤久三郎・彫塑：菊池一雄、工芸：浅見隆三・堂本漆軒らの作品を展示）。3・1～8にも他のメンバーにより開催。 日本美術工芸 58、60</p> <p>1・15 京都工芸作家審議委員会結成（同会は、在洛工芸作家の自主的活動の審議機関として結成。審議委員は(陶)中島清・近藤悠三・勝尾青竜洞・徳力孫三郎・楠部弥弼・浅見隆三・鈴木清・河村喜太郎・伊藤翠壺、(染)稲垣稔次郎・中村鶴生・皆川月華・山鹿清華・岸本景春、(漆)番浦省吾・水内平一郎・久保金平・黒田辰秋、(金諸)小林尚珉・浅井徳太郎の20名、うち中島・近藤・楠部・稲垣・中村・番浦・黒田の7名は常任委員を兼ねる)。 日本美術工芸 85</p> <p>1・26～30 第1回匠会染色展、朝日画廊に開催（今西良夫・春日井秀雄・山出守二・皆川泰蔵・佐野猛夫・三浦景生ら若い作家のグループ展）。 同上</p> <p>1・28 創造美術協会発会式、<sup>(2)</sup>寺町錦スター食堂において挙行（京都の奥村厚一・広田多津・菊池隆志・上村松篁・秋野不矩・沢宏毅・向井久万、東京の山本丘人・吉岡堅二ら東西新鋭日本画家13名が、文展を改組してできた日展が相変わらず因習に縛られた封建的性格を脱しきれないため、これに不満をもち結成した新在野団体)。 京都 1・22、29</p> <p>3・4 京都市立美術工芸学校、京都市立美術高等学校と改称（絵画・図案・彫刻・漆工・建築の5科とする）。 京都市立学校園沿革</p> <p>3・9～14 四耕会第1回陶芸展、朝日画廊に開催（宇野三吾を中心に鈴木康之・清水卯一・林康夫・伊豆蔵寿郎・大西金之助ら20代作家の自由な研究作品展）。 日本美術工芸 60</p> <p>3・10 労働者美術サークル協議会結成、市民会館に発会式を挙行（島津製作所・陶試・市役所など7美術団体が組織、メーカーのポスター展や京都新美術人協会による巡回美術教室の開設などを協議する）。 同上</p> <p>3・一 京都新美術人協会、日本美術会京都支部に移行。 日本の前衛絵画</p> <p>3・一 新陶芸会解散（中島清・浅見隆三ら9名が結成した同会は、京都工芸作家審議委員会が設立され工芸復興の道も開かれたのを機会に解散を決定）。 京都 3・20</p> <p>4・1 京都府陶工職業補導所、京都府陶工公共職業補導所と改称。 告示 276号、同所事業概要昭45</p>	<p>4・3～28 古代染織展、京都博物館に開催（明石染人収集の世界的に有名な山科鐘紡コレクションの公開で、コプト・ゴブラン・カシミールさらさ・ピロード・ペルーのインカ綴織など約500点を展観）。 日本美術工芸 61</p> <p>4・下 京都木版画版本連盟結成（芸艸堂・まつ九・美雲木版社・内田美術版画店・京都版画院・八寮堂の6版元が結成）。 日本美術工芸 62</p> <p>4・一 稲垣稔次郎、美術懇話会協賛により最初の個展を朝日画廊に開催（このときはじめて型染を発表する）。 稲垣稔次郎作品集</p> <p>4・一 創造美術協会、大阪に同名の洋画団体があるため創造美術と改称。 日本美術工芸 61</p> <p>5・1～9 フランス絵画複製展、朝日新聞社・京都美術懇話会共催で朝日画廊に開催。 日本美術工芸 62</p> <p>5・21～25 第1回パンリアル展、丸善画廊に開催（市立美術専門学校卒業の三上誠・青山雅美・山崎隆・八木一夫・鈴木治らシュールの洋画と陶芸展）。 日本美術工芸 62</p> <p>5・一 京都美術館、美術品の買上げを中止（これまでに日本画122点、洋画68点、彫刻23点、工芸品39点、計252点を購入しまたは寄贈をうける）。 京都 昭32・3・1</p> <p>5・一 新樹会創立（昭23京都絵画専門学校卒業生を中心に結束した染織研究団体。12・1～6第1回展を朝日画廊に開く）。 日本美術工芸 121</p> <p>6・20 赤土会(社)追憶展、南禅寺方丈に開催（河合栄之助・河村喜太郎・楠部弥弼・道林俊正・八木一帥・荒谷芳影の6陶芸家が30年前の結成当時を回顧しての追憶展で河村靖山らも座談会に出席）。 日本美術工芸 64</p> <p>7・10～18 第1回転石会作品発表会、京都美術館に開催（福田平八郎・小野竹喬・徳岡神泉・上村松篁・菊池隆志・奥村厚一・須田国太郎・小磯良平・伊藤継郎・須田剋太・庫田毅・菊池一雄・小合友之助・井島勉・上野照夫・龍村謙・生島遼一・大山定一・野上素一・並川安幸・深瀬基寛・竹中郁の美術家と批評家22名を同人とする転石会の試作展、10日毎日会館に座談会を開催）。 日本美術工芸 64</p> <p>7・一 陶芸家団体 走泥社創立<sup>(1)</sup>（同人、八木一夫・山田光・鈴木治・松井美介・叶光夫、20歳そこそこの若手の陶芸家により、「前衛」陶芸制作をめざす）。 日本美術工芸 350</p> <p>8・14 京都工芸作家審議委員会、日展問題について作家大会で日展民主化案を決議、文部省・芸術院等へ意見書を提出（同案は日展の中央集権主義を排して地域文化の創造発展をはかるため全</p>	

参	考	日	本
(1)走泥社創立挨拶状 走泥社の新発足について 戦後の美術界は、自己の混乱から脱出するために、結社という便法を必要としたが、漸く今日、その暫定的役割は終了したかに見える。虚構の森を蹴翔つ早晨の鳥は、も早、真実の泉にしか自己の相貌を見出さぬであろう。我々の結合帯は、`夢みる温床'ではなく、まさに白日の下の生活それ自体なのだ。青年作家集団を解散して、新たに走泥社を結成した我々の意図も此処に在るのであり、先輩各位の旧に倍しての御叱声御鞭達あらむことを希求してやまない。右葉書を以って、御挨拶に代へます。 日本美術工芸 350		1・26 創造美術会結成、発会式（山本丘人・吉岡堅二・福田豊四郎・上村松篁・向井久万ら東京・京都の日本画家、同年9月第1回創造美術展を都美術館に開催)。 1・一 梅原龍三郎・安井曾太郎を選者として新設された新人賞である一燈賞、第1回受賞に奥田郁太郎。 1・一 『美術手帖』、美術出版社から創刊。 2・一 第2回泰西名画展、都美術館に開催（国内にある油彩・水彩・素描・版画など300点)。 4・1～5・31 日本美術史総合展、東京博物館に開催（「高野山赤不動」、「聖徳太子像」)。 4・一 北斎百年祭記念浮世絵展。 4・一 小早川清没（享年50)。 5・一 日本芸術院賞復活、日本画には伊東深水「鏡」。 6・一 東京国立博物館表慶館、日本と西洋の油絵の常時陳列館となる。 6・一 松本竣介没（享年37)、入江波光没（享年62)。 8・14～20 第1回全日本書道展、毎日新聞社主催にて開催。 8・一 高橋誠一郎、日本芸術院長になる。 8・一 近藤光紀没（享年48)。 9・一 日本芸術院の美術行政に反対して山鹿清華・岩田藤七・香取正彦・北原千鹿・山崎寛太郎・高村豊周ら工芸家は日展不参加を決定。 9・一 北島浅一没（享年62)。 10・11 荻須高德、渡仏（画家として戦後最初)。 10・15～11・30 近代日本美術総合展（4月の日本美術史総合展のあとをうけて)。 10・20～11・20 第4回日展（日本芸術院主催となり第5科書道を設置、福田平八郎「新雪」など、7月国画会、二科会など洋画7団体不参加を表明)。 10・一 中西利雄没（享年49)、廣幡憲没（享年40)、岡本一平没（享年63)。 11・一 第6回文化勲章（美術部門）は安田靉彦・朝倉文夫・上村松園が受賞。 12・一 第2回一燈賞には小泉清。	この年 ▷ 日本陶業連盟創立。 ▷ 陶業協会結成（愛知・岐阜・三重・京都)。
(2)創造美術創立要項 綱領 成々は世界性に立脚する日本絵画の創造を期す 規約 1 本会は創造美術と称す 2 創造美術は独自の研究機関を設け随時文化人との交流研究展を行う 3 創造美術は厳正なる態度に於て展覧会を開催す 4 創造美術は広く志を同じくする作家の参加を期待する 5 創造美術会員は在野精神に立脚し官展に関与せず 創造美術 1			
(3)第1回創造美術展 大河内正夫「駅」、中山昌子「苔庭」、麻田鷹司「夏山」、秋野不矩「作品I」・「作品II」、沢宏毅「熟麦」・「積」、広田多津「夕」・「昼」、奥村厚一「初冬」、菊池隆志「子供」、向井久万「牡丹」・「裸婦」、上村松篁「木蔭」など。 同展出品目録			

京 都 府	参 考 日 本
<p>国を4地区に分け各ブロックに美術文化協議機関を設け、その代表で全国最高美術協議会を組織、芸術院を解消して同会で今後のあり方を決定すること、日展は各ブロックの総合連立展とすることなどを決議したもの。29日審議委員全員の不在出品を決定。 日本美術工芸 119、京都 8・30</p> <p>9・一 第1回走泥社展、大阪高島屋に開催。 日本美術工芸 350</p> <p>10・1～6 太田喜二郎個展、朝日画廊に開催(吉沢義則博士と合作の絵巻と小品十数点を展示)。 太田喜二郎遺作展図集、日本美術工芸 121</p> <p>10・26～31 創造美術創立第1回展、<sup>(9)</sup>大丸に開催(搬入数283中55点が入選。うち京都側は搬入数53人中9点入選。奨励賞は小郷良一・松井章)。 日本美術工芸 122、同展出品目録</p> <p>10・一 自由美術協会・美術文化協会連立モダンアート展、藤井大丸に開催(翌年も開く)。 日本の前衛絵画</p> <p>10・一 紅緑社結成(版画作家団体)。 京都年鑑 昭25</p> <p>11・2 上村松園、女性として初の文化勲章を受ける。 日本美術工芸 122</p> <p>11・13～18 京都彫塑家協会第1回作品展、朝日画廊に開催(会員21名が出品。その後同会は自然消滅)。 京都年鑑 昭28、日本美術工芸 123</p> <p>11・16～18 二科会京都研究所、研究生30人の作品30点の展覧会を河原町蛸薬師丸善画廊に開催。 京都 11・18</p> <p>11・20 京大文学部学術普及会主催現代美術講座公開(講師：井島勉・菊池一雄、27日講師：森啓・神田松之助、12・4 講師：上野照夫)。 日本美術工芸 123</p> <p>11・23～28 京都美術懇話会第1回作品展、大丸に開催(主催同懇話会・朝日新聞社、出品者は日本画尺八横物菊池契月・西山翠嶂・小野竹喬・金島桂華・堂本印象・察本一洋・上村松篁・水田竹園・北沢映月ら40名、洋画：太田喜二郎・黒田重太郎・須田国太郎・伊谷賢蔵・錦義一郎・川端弥之助・庫田發ら26名、彫塑：松田尚之・菊池一雄ら6名、工芸：清水六兵衛・富本憲吉・河井寛次郎・山鹿清華・小合友之助・楠部弥弼・番浦省吾ら陶器染織作家32名で在京有力作家がこぞって出品の総合美術展)。 日本美術工芸 123</p> <p>11・25～30 入江波光遺作素描展、朝日画廊に開催(小野竹喬・榎原紫峰2名の選による小品20点を展示)。 日本美術工芸 123</p> <p>11・一 清水匋苑、清水六和を顧問、同六兵衛を社長として創設(輸出陶芸界に進出)。 日本美術工芸 122</p>	<p>12・1～6 新樹会第1回染織作品展(朝日画廊)。</p> <p>12・5～23 第4回日展京都陳列会(京都博物館および丸物)。</p> <p>12・13～18 北大路魯山人新作絵画雅陶展、高島屋に開催(赤絵染付志野織部など百数十点と彩画10点を陳列)。 日本美術工芸 124</p> <p>12・15～20 京都工芸作家審議委員会、日展京都陳列会に対抗して京都工芸作家団体連立展を日展と同じ会場(丸物)に開催(新匠・走泥社・匠・新樹会・創人社など各団体から陶器34・漆器25・染織45・金工15・木工2、計121名の日展不出品作家によるはじめての工芸在野アンデパンダン展)。 日本美術工芸 124、京都 9・19、同展目録</p> <p>12・16 京都古文化保存協会結成(府文化課が世話していた京都国宝・京都名園両保存協会を解散し知恩院における総会で結成。理事長：岡田戒玉、事務所：智積院)。 日本美術工芸 124</p> <p>12・一 京都陶芸家クラブ(会長清水六兵衛)、東陶会(東京 板谷波山)に対抗して発足(会員、森野嘉光・河合栄之助・新開寛山・井上治男ら、このクラブ内に、陶玄会・白泥社・黏土会などの研究会がある)。 京焼百年の歩み</p> <p>この年 ▷ 蒔絵家 三木表悦没(明12福井生)。 京都の美術工芸100年展目録</p>

参 考 日 本

京	都	府
<p>2・10 市立美術専門学校、教授会で美術工芸で有能な活動ができる社会人を教育するという新方針を確認、教養学科の拡充を強化し、市民のために学園を解放する。<span style="float:right">日本美術工芸 126</span></p> <p>2・20 京都書家クラブ結成（発起人は原狙山・綾村坦園・能勢照郷・私山公道・日比野五鳳の5名。会員約70名）。<span style="float:right">同上</span></p> <p>3・26～31 四耕会陶芸アンデパンダン展（朝日画廊）。</p> <p>3・一 セ・モア結成（日本画 麻田弁次・洋画 川端弥之助・工芸 米沢蘇峰・彫塑 岡本庄三・建築 宇都宮誠太郎・写真 岡本東洋ら13名が結成。春秋2回展覧会を開催、美術運動を展開する）。<span style="float:right">日本美術工芸 127</span></p> <p>4・1 京都府陶工公共職業補導所、陶画科を新設。<span style="float:right">同所事業概要 昭45</span></p> <p>4・1 日吉ヶ丘高等学校、元京都市立美術工芸高等学校校舎（東山区今熊郡日吉町50番地）に設立。<span style="float:right">京都市立学校園沿革</span></p> <p>4・一 京都工芸繊維大学発足（旧京都高等工芸学校）。</p> <p>5・2～10 第35回光風会京都展、高島屋に開催（会員山田新一ら京都作家を主とする初めての京都展）。<span style="float:right">日本美術工芸 128</span></p> <p>5・3 朝日画廊閉鎖（昭21・11 京都朝日ビル内に開設され、絵画・工芸展を京都美術懇話会協賛あるいは主催で開くこと129回、純粹の画廊として京都美術界に寄与する。朝日ビル美術部の廃止とともに閉鎖）。<span style="float:right">同上</span></p> <p>5・11～25 欧州名画複製展、京都美術館に開催（ルネッサンスから近代フランスまでの複製絵画200点を展観。17日上野照夫の解説講座、19日井島勉・上村松篁らの公開座談会を開催。）<span style="float:right">市美術館と美術品、日本美術工芸 129</span></p> <p>5・14～19 第1回パブリック展、藤井大丸に開催（山崎隆・大野秀隆ら市立美術専門学校日本画科出身者11名を会員とする前衛絵画展）。<span style="float:right">日本美術工芸 129</span></p> <p>5・15 京都美術 研究所新設、開所式を挙（同研究所は市立美術専門学校の教授陣を指導者とし、日本画科の卒業生39名を研究所員として上京区等持院東町35校谷文庫内に新設。15～16日記念展を開催）。<span style="float:right">日本美術工芸 129、京都年鑑 昭25</span></p> <p>7・22 日吉ヶ丘高校、美術課程設置案を市教育委員会に上程、可決される。<span style="float:right">京都市立学校園沿革</span></p> <p>7・一 清水陶磁器協同組合設立、また東山陶器協同組合・陶技協同組合も設立。<span style="float:right">京焼百年の歩み</span></p> <p>8・27 日本画家 上村松園没（明8京都生、名津彌、享年74）。<span style="float:right">京都 8・29、日本芸術院史、日本美術年鑑 昭22-26</span></p>	<p>9・一 京都市工芸図案家協会、日本染織図案家連盟に発展的統合（本部支部制を設置、連盟本部は官庁連絡の必要から東京に設けられていたが、ほとんど統制が撤廃されたため、旧日本図案連盟当時のように京都に移すことを要望）。<span style="float:right">図案年鑑 1</span></p> <p>9・一 稲垣稔次郎、市立美術専門学校講師となる（昭25・4 市立美術大学講師兼市立美術専門学校助教授、昭27・4 市立美術大学助教授、昭33同大学教授となる）。<span style="float:right">稲垣稔次郎作品集、日本美術年鑑 昭39</span></p> <p>10・13 洋画家 森脇忠没（明21島根県生、享年62）。<span style="float:right">日本美術年鑑 昭22-26</span></p> <p>10・26 日展京都展、犬丸文部省芸術課長と市観光局長が会同の結果、市は予算難と会場難のため本年に限り開催取りやめと決定。<span style="float:right">日本美術工芸 134</span></p> <p>10・29～11・21 第5回日展<sup>(1)</sup>。<span style="float:right">日本美術年鑑 昭22-26</span></p> <p>11・8～13 第2回創造美術展（大丸）<sup>(2)</sup>。</p> <p>11・10～27 入江波光遺作展、京都博物館に開催（国展第1回出品作「降魔」・滞欧作「南欧風景」、水墨画「松に鷹」・佛画「不動」・「観世音」、ほかに「振袖火事」・「法隆寺壁画」の模写など150点を展観）。<span style="float:right">日本美術工芸 135</span></p> <p>11・22～27 第1回京都陶芸家クラブ新作陶展、高島屋に開催。<span style="float:right">同上</span></p> <p>11・一 京都二紀会結成。<span style="float:right">市美術館調書</span></p> <p>12・16 福田平八郎（日本画）・菊池一雄（彫塑）、第1回毎日美術賞受賞決定。<span style="float:right">日本美術工芸 135</span></p> <p>12・一 市立美術専門学校、学識者から植田寿蔵・井島勉・滝川幸辰の3名を加えて大学昇格委員会を結成（17日新制大学設置委員会が同校を視察、昭25・4 から美術大学への昇格が確定的となる）。<span style="float:right">同上</span></p> <p>12・27 京都府工芸美術総合研究所を下京区四條通河原町西入ル御旅町に設ける。<span style="float:right">告示 927号</span></p> <p><b>この年</b></p> <p>▷ 春、京都学生美術連盟結成。<span style="float:right">京都年鑑 昭25</span></p> <p>▷ 富本憲吉、市立美術専門学校客員教授となる（昭25、市立美術大学教授となる。昭38・3 同大学教授を定年退職し、5月学長となる）。<span style="float:right">日本美術年鑑 昭39</span></p> <p>▷ 富本憲吉、このころから花・白雲悠々・風花雪月などの文字を模様として作品に入れ始める。<span style="float:right">同上</span></p> <p>▷ 染織家 広岡伊兵衛没（明7・9・9 京都生）。<span style="float:right">明治美術名作展</span></p> <p>▷ 春、京都工芸作家審議委員会解散。<span style="float:right">日本美術工芸 131</span></p>	

参	考	日	本
(1)第5回日展特選受賞者（京都関係のみ）	日本画 浜田観「蓮池」、田代正子「街角の夕」 彫 塑 清水礼四郎「過ぎにし日」 美術工芸 宮下善寿「陶器紅映瓷花壺」、叶光夫「磁器印壺」、皆川泰蔵「和染本栖湖畔の農家」 <span style="float:right">日本芸術院史</span>	2・11～3・3 第1回日本アンデパンダン展、読売新聞社主催で都美術館に開催（以後毎年1回開かれ、恒例の有力美術展なる）。	5・31 東京美術学校、東京音楽学校を統合し東京芸術大学として発足。
(2)第2回創造美術展（京都関係のみ）	沢宏毅「卓子」、広田多津「立像」、奥村厚一「村」、向井久万「娘達」、秋野不矩「少年群像」、菊池隆志「裸像」 <span style="float:right">日本美術年鑑 昭22-26</span>	5・一 梅原龍三郎・安井曾太郎自選展、銀座松坂屋に開催（梅原95点、安井85点）。	6・26 日本美術家連盟結成、創立総会（美術著作権の確立、生活擁護などをめざす。会長安井曾太郎、委員長伊原宇三郎）。
		9・1～19 第34回院展、都美術館に開催（前田青邨「風神雷神」など）。	9・21～10・10 第2回創造美術展（吉岡堅二「湿原」、山本丘人「草上の秋」、福田豊四郎「踊る娘達」など）。
		10・一 バリ滞在の荻須高德の「モンマルトル小景」、モナコ賞を受賞。	10・一 仏国、ギメ東洋美術館長、ルネ=グルッセ、仏国文化使節団として来日。
		11・29 第1回毎日美術賞（林武「梳する女」、平田平八郎「新雪」、菊池一雄「青年像」など）。	11・一 大観画業60年展、朝日新聞社主催、上野松坂屋に開催。
		12・一 第3回一燈賞、一水会の小野末受賞。	12・一 北蓮蔵没（享年74）。
▷ 上野照夫、京大専任講師に就任（日本・印度などの美術研究を講じる。昭28教養部教授就任。昭43文学部教授就任）。 <span style="float:right">京都大学70年史</span>			
	▷ 中井宗太郎、立命館大学講師となり「日本史研究会」グループに参加（昭29教授就任、昭35退職）。 <span style="float:right">日本美術年鑑 昭42</span>		
	▷ 国立陶磁器試験所、名古屋に移転。 <span style="float:right">京焼百年の歩み</span>		
	▷ このころ漆芸やすらぎ会結成。 <span style="float:right">市美術館調書</span>		

京	都	府
<p>1・9 京都府工芸美術総合研究所陳列所（通称京都府ギャラリー）、四条河原町西入ルに開所。 <small>日本美術工芸 138</small></p> <p>1・20 府商工部に美術工芸課を設置（美術工芸家の環境改善・美術工芸家と伝統産業との密接な連けい・伝統産業の振興・デザインの保護奨励などを基本的行政目標とする。全国唯一）。 <small>庁達1号、同課事業概況 昭36</small></p> <p>1・一 京都輸出美術工芸作家協会常設館、四条柳馬場東入の京都貿易館内に新設。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>2・一 日本美術家連盟関西支部設置（支部長須田国太郎、委員長小磯良平）。 <small>日本美術年鑑 昭22-26、須田国太郎</small></p> <p>3・一 八木一夫の前衛陶器、ニューヨーク近代美術館に陳列、紹介される。<small>日本美術工芸 350</small></p> <p>4・1 日吉ヶ丘高校校舎が狭いため今熊野小学校の一部を借用、美術課程西洋画科、図案科の教室に充てる。 <small>京都市立学校園沿革</small></p> <p>4・1 重税に苦しみ転廃業続出の陶芸家ら、五条坂の京都陶磁器共同作業場に美術工芸部を新設（伊東翠壺を部長に9作家が参加、生産から販売までの共同企業態勢を整備）。<small>日本美術工芸 140</small></p> <p>4・1 市立美術大学・美術専門学校教授陣決定（美術大学：学長代理長崎太郎、教授小野竹喬・黒田重太郎・上野伊三郎・松原厚・佐和隆研・岡本午一・助教授上村松篁・奥村厚一・秋野不矩・川端弥之助・国盛義篤・辻晋堂・小合友之助・平館翁・重久篤太郎・鷹阪竜夫・吉川武・向井正也。美術専門学校：校長長崎太郎、教授林司馬・高林和作・三宅勇蔵・寺田勇・助教授山本格二・稲垣稔次郎・草光信成・福井稔）。 <small>同上</small></p> <p>4・5 洋画家 吉田博没（明9福岡県生、享年75）。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>4・8、9 鶴巻鶴一博士遺作展、大丸に開催。 <small>日本美術工芸 140</small></p> <p>4・14〜23 京都華道芸術協会、京都市と共催で第1回華道京展を丸物に開催。 <small>同上</small></p> <p>4・23 日本美術刀剣保存協会京都府支部設立記念美術刀剣展、嵯峨宝篋院に開催。 <small>同上</small></p> <p>4・一 京都市立美術専門学校、京都市立美術大学と改称、新制の美術大学として発足（工芸科は図案・陶磁器・塗装・染織の4専攻よりなる）。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>4・一 京都美術館所蔵の美術工芸品 251 点のうち、特に優秀な作品として戦争中大覚寺にワクをはずして疎開させてあった土田麦僊・西村五雲・菊池契月・西山翠嶂・上村松園・山元春挙らの名品13点、傷みがはげしいため費用 17万2,800円をかけて修理復元にきまる。 <small>日本美術工芸 140</small></p>	<p>5・一 太田喜二郎、市立美術大学名誉教授となる（6月京都学芸大学教授となる）。 <small>太田喜二郎遺作展図集</small></p> <p>5・一 芝田米三の「照る冬の日」サロン・ド・ブランタン展において2等に入賞。 <small>日本美術工芸 141</small></p> <p>7・2 金閣寺焼失（鹿苑寺の国宝金閣、放火のため全焼、第1層法水院の阿弥陀・観音・勢至三尊像（運慶作）・国宝義満像、第2層潮音閣の観世音（恵心作）・四天王（空海作）、第3層究竟頂の後小松天皇親筆など焼失）。 <small>日本美術工芸 142、日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>7・5 市の京都美術館接收解除の陳情に対して、京都特別調達局長から市長あてに「グリーン大佐の命により不許可」の通告。 <small>日本美術工芸 143</small></p> <p>8・30 ロダンの「考える人」・「アダム」、所有者松浦卓（芦屋市松ノ内22ノ10証券業）から京都市に寄託され、京都博物館につく（この2作は国立博物館が買い上げた「イブ」とともにロダンの日本における代表作。12・6博物館玄関に陳列）。 <small>日本美術工芸 144、147</small></p> <p>9・22〜10・8 第3回創造美術展<sup>(2)</sup>。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p> <p>10・2 日本染織図案家連盟関西支部、第6回定期総会を染織試験場に開催。本総会において機構改革案を決議、関西支部を独立改組し日本染織図案家連盟として発足（名誉会長稲島之彦）。 <small>図案年鑑 1</small></p> <p>11・5〜7 美学会第1回全国大会開催（5日西本願寺飛雲閣で会員懇親会、毎日会館で植田寿蔵・上野直昭の公開講演会。6日京大で研究発表会、7日桂・修学院両離宮拝観）。 <small>日本美術工芸 147</small></p> <p>11・18 市立美術大学主催「美術の京都」特別講座開催（講師佐和隆研・龍村謙、25日講師上野照夫・堀内正和、12・2 講師富本憲吉・小林太市郎、9日小野竹喬・須田国太郎）。 <small>同上</small></p> <p>11・27 第1回日本染織図案家連盟展(図連展)東京の華道会館に開催（以後毎年開く）。 <small>図案年鑑 1</small></p> <p>11・一 現代日本陶芸展、パリのチュエルヌスキー美術館に開催（富本憲吉・河井寛次郎・浜田庄司・北大路魯山人・石黒宗麿らの作品好評）。 <small>毎日 昭27・4・17</small></p> <p>11・一 京都美術館、日展京都陳列会のポスターに二科会会員吉原治良の作品を無断でほとんどそのまま盗用、日本美術会関西支部（支部長須田国太郎）から抗議を受け、ポスター4万枚を撤回。 <small>日本美術工芸 147</small></p>	

参	考	日	本
<p>(1) 第6回日展特選受賞者（京都関係のみ） <small>日本画</small> 麻田弁次「樹蔭」、堂本元次「白壁の土蔵」、谷野圭一「首夏」、中田晃陽「洛北」 <small>美術工芸</small> 中村鵬生「手織錦野鶴図壁掛」 <small>日本芸術院史</small></p> <p>(2) 第3回創造美術展（京都関係のみ） 菊池隆志「思索」、奥村厚一「樟陰」、向井久万「浮游」、上村松篁「八仙花」、秋野不矩「少年群頂の後小松天皇親筆など焼失」。 <small>日本美術年鑑 昭22-26</small></p>	<p>12・15 堂本印象、芸術院会員となる。 <small>日本美術年鑑昭 22-26</small></p> <p><b>この年</b> ▷ 明石染人、京都工芸繊維大学講師・市立美術大学講師となる。 <small>日本美術年鑑 昭35</small> ▷ 富本憲吉、このころ米国の日本大使館買上げの金銀彩蓋付壺にはじめて銀に白金をまぜることに成功。 <small>日本美術年鑑 昭39</small> ▷ 川島織物研究所佐々木信太郎、上代織技研究の一環として羅の組織を解明し、織法についても詳しい考案を発表（『川島織物研究所報告、第2報』（昭25）・『同第4報』（昭35））。 <small>京の工房</small> ▷ 京都彫刻家クラブ結成（日展2名・二科会1名・行動美術3名・新制作派2名の8名からなる若い新進彫刻家グループ）。 <small>京都年鑑 昭28</small> ▷ 京都陶芸界沈滞（税金攻勢のため富本憲吉は摂津富田、河村喜太郎は瀬戸に去り、伊東陶山八木一岬・道林俊正・中島清ら一時廃業して会社員や、労働者となり、京焼の危機が伝えられる）。 <small>日本美術工芸 138</small> ▷ 河村喜太郎、五条坂から愛知県西加茂郡の猿投山山麓に移住（同地に散在する異色ある陶土に魅力を感じたため、猿投町平戸橋畔に陶房を移す）。 <small>日本美術年鑑 昭42</small> ▷ 京展、予算難で開催できず。 <small>京都 8・28</small> ▷ 第10回美術文化協会展、京都展開催を開始。 <small>同協会沿革史</small></p>	<p>1・6 洋画家 南薫造没（明12生、享年66）。 1・一 『芸術新潮』新潮社から発刊。 2・4 藤田嗣治（昭24・3・10渡米、ニューヨークで個展をひらく）渡仏、昭30・2・26仏国に帰化。 2・8 丸木位里・赤松俊子、連作「原爆の図」発表（日本美術会第3回アンデパンダン展、全10部、〜昭31）。国内・国外の各地で巡回展。 2・一 上村松園とその芸術展、毎日新聞社主催、日本橋高島屋に開催（毎日新聞社、上村松園賞を設定する）。 2・一 彫刻家 大国貞蔵没（享年61）。 3・15〜31 第1回秀作美術展、三越に開催。 3・一 昭24年度芸術院賞、鍋井克之「朝の勝浦港」（第3回二紀会展出品）など。 4・15 漆芸家 六角紫水没（慶応3生、享年83）。 5・2 日系米人の前衛彫刻家イサム・ノグチ来日。8・18〜27個展。 5・30 文化財保護法公布（国宝保存法廃止、8・29 文化財保護委員会発足）。 7・一 行動美術協会、彫刻部を新設。 9・一 横山大観、芸術院会員を正式に退く。 9・一 モダンアート協会結成（自由美術家協会を脱退した荒井竜男・山口薫ら8人、翌26・3・1〜8 第1回展）。 10・29〜11・28 第6回日展<sup>(1)</sup>、都美術館に開催（中村岳陵「気球揚る」、徳岡神泉「鯉」、西山英雄「桜島」など）。 10・一 昭和25年度文化勲章、小林古径受賞。 10・一 田中案山子・茨木杉風ら同人8名、中絶していた再興美術院を再組織。 11・一 昭和25年度 毎日 美術賞、吉岡堅二の「湿原」、猪熊弦一郎の「慶応義塾大学々生ホールの壁画（デモクラシー）」・「名古屋丸栄ホテルホールの壁画」にきまる。 12・一 堂本印象・山口蓬春・中村研一・高村豊周・堆朱楊成、芸術院会員となる。 12・一 国立博物館、美術映画の製作を始める（昭25「美の殿堂」、昭26「上代彫刻」、昭27「桃山美術」など）。</p> <p><b>この年</b> ▷ 河井寛次郎還暦記念展（東京・大阪両高島屋・日本民芸館）</p>	



京	都	府
<p>3・3 京都版画協会結成(麻田弁次・浅野竹二・亀井玄兵衛・徳力富吉郎ら12名を同人として結成、版画芸術の研究と普及並びに作家の擁護を目的とする。事務所は京都工業研究所。12・4～10第1回展を丸物に開く)。 日本美術工芸 150、159</p> <p>3・一 日本陶器、伊国へ送られる(ファンツア陶器博物館では日本部を新設することになり、伊国大使館を通じて京都から楠部弥次・近藤悠三・清水六兵衛・宇野三吾・石黒宗麿・河井寛次郎・八木一夫・鈴木治らの新作が送られる)。 日本美術工芸 151</p> <p>4・1 日吉ヶ丘高校、美術課程に陶芸科(定員30名)・服飾科(定員60名)を新設。 京都市立学校園沿革</p> <p>5・3 染織業 飯田新太郎没(明17京都生、享年67、飯田新七の長男)。 日本美術年鑑 昭27</p> <p>5・16 徳岡神泉、日本芸術院賞をうける。 日本芸術院史</p> <p>5・19～30 日仏美術交換現代フランス美術展〔サロン・ド・メエ日本展〕、高島屋に開催(出品数約50点、絵画ではサンジェ、マルシャン、マルセル、ピニョン、ミノー、版画ではマネシエ、彫塑ではミュレル、デコンバンなどの作品を展示)。 日本美術工芸 153、市美術館と美術品</p> <p>5・一 京都金芸作家協会(錚々会)創立(上京区等持院西町、加藤宗蔵方。会員は浅井徳太郎・今大路長光・上田哲三・大久保鼎湖・加藤宗蔵・加茂雲峰・金谷五郎三郎・金江宗観・小林尚珉・小泉八郎・野田喜市・村田信統・村上直行・辻井健三・五島正宏)。 日本美術年鑑 昭29</p> <p>6・12～17 青甲社創立30周年記念作品展、大丸に開催(主宰西山翠嶂の「黒豹」をはじめ、日展日本画壇の堅実な写実風描写でよくまとめられた作品48点を展示)。 日本美術工芸 154</p> <p>7・11 日本画家 森守明没(享年59)。 日本美術工芸 155</p> <p>7・15～31 土橋永昌堂、四条堺町の自宅を画廊に改装、徳岡神泉・福田平八郎・堂本印象・金島桂華・梅原龍三郎・須田国太郎・小野竹喬らの新作を展観(以後同画廊は古美術品の陳列を主とする方針)。 同上</p> <p>8・29～9・6 京都竹屋町刺繍展、丸物に開催(竹屋町ぬいの最後のひととされる山田ふみの遺作約30点を展観)。 日本美術工芸 156</p> <p>9・10 京都から上村松篁・向井久方・広田多津・沢宏毅・秋野不矩・奥村厚一・菊池隆志の7名が、参加の創造美術、第4回展をむかえるにあたり、洋画の新制作派と合流、新制作派日本画部と改称するむね声明。 日本美術工芸 157</p>	<p>9・一 京都府陶磁器協同組合設立(清水陶磁器協同組合・東山陶器協同組合・陶技協同組合の合併。市・府の援助により京焼業界初の共同焼成事業を開始、昭27・5以降)。 京焼百年の歩み</p> <p>10・27 洋画家 太田喜二郎没(明16・12・1京都生、享年67)。 太田喜二郎遺作展図集、日本美術工芸 158</p> <p>10・28～11・28 第7回日展<sup>(1)</sup>。 日本美術年鑑 昭26～27</p> <p>11・3～5 行動美術野外彫刻展、円山公園に開催(京都ではじめての試み。出品13点)。 日本美術工芸 158</p> <p>11・10～25 第15回新制作展<sup>(2)</sup>、丸物に開催(創造美術が日本画部として合流し最初の展覧会)。 日本美術工芸 159</p> <p>11・12 福田平八郎・須田国太郎、大宮御所で天皇陛下に絵について進講(須田の題は「京都の洋画」)。 同上</p> <p>11・一 稲垣稔次郎の「村の画卷」、アート・インスティテュート・オブ・シカゴの所蔵となる。 稲垣稔次郎作品集</p> <p>12・8～16 第5回二紀会展、丸物に開催(京都ではじめての二紀会展、前衛絵画を批判するアカデミズムのよさを身につけた作風)。 日本美術工芸 160</p> <p>12・18 洋画家 北脇昇没(明34愛知県生、享年50)。 日本美術年鑑 昭27、京都 12・21</p> <p>12・一 日本画家 玉村方久斗没(享年58)。 異色の2人展目録</p> <p>この年</p> <p>▷ 稲垣稔次郎、このころより型染の原図をもって、はじめて木版をつくる。稲垣稔次郎作品集</p> <p>▷ 富本憲吉、シダを連続模様にすることに約1年かかって成功。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>▷ 日展第4科への京都側出品の入選率は非常に高く、特に陶芸から特選2名を出す。 京都年鑑 昭27</p> <p>▷ 6代清水六兵衛、パリのチュルヌンスキー博物館に開催の現代日本陶芸展に「梅花瓶」を出品、同館の所蔵となる。 清水六兵衛歴代作品集</p> <p>▷ 河井寛次郎、フランスで開催の陶器展に出品。このころしきりに木彫を試作。 日本美術年鑑 昭26</p>	

参	考	日	本
○轉石會	<p>いろいろな立場から美術について語りあいたいと思ひ、われわれが会合をもち始めたのは、戦後間もない頃であった。初めは会の名さへなく、ただ忌憚なく意見を交換できればそれでよかった。その後、便宜上の会名をつける必要に迫られた。誰かが「轉がる石は苔をもつけず」といふ古い諺を想ひついた。われわれはひそかに「切嗟琢磨して苔をつけないでおかう」といふ意味に解して、「轉石會」と決めた。正しくは「あまり動いては一文の得にもならぬ」の意だそうだが、無償の精神は、芸術に参じる者の心構へであってよい。</p> <p>そのうちに、作家の作品をならべて論議の資料にしてみようといふことになり、昭和23年の夏、最初の陳列会を京都で開いた。その後、一般の批判を仰ぎたいと思つて、大阪や東京においても展観することになった。今年は第4回展である。</p> <p>日本の美術界の動きも、とみに活発となつて来た。海外からの刺戟についても、独自の個性といふことについても、多々考へてみなければならぬ問題があるやうに思ふ。現代の美術家並びに美術愛好者に寄せられた課題の解決は、現在の位相が何であるかを真剣に反省することから始められる必要がある。われわれの真意もそこに一つの研究目標を置いている。</p> <p>このやうな来歴を持つ展覧会であるから、われわれは必ずしもこれを美術運動的なものとは考へてゐない。ただ内からも外からもいろいろ参考の資を得て、作家と非作家の両方の立場から厳密な検討を加へてみたいと思ふのである。</p> <p>昭和26年8月</p> <p>轉石會パンフレット</p>	<p>2・13～3・4 現代フランス美術展、毎日新聞社主催、高島屋に開催。昭25サロン=ド=メエ代表作展。</p> <p>2・一 第1回松園賞は秋野不矩「少年群像」。</p> <p>3・31～5・13 マチス展、東京博物館・読売新聞共催、表慶館に開催。</p> <p>3・一 ピカソ陶器石版画展、文芸春秋新社主催、上野松坂屋に開催。8・26～9・2 ピカソ展(高島屋に開催)。</p> <p>3・一 芸術院賞、徳岡神泉「鯉」、寺内万次郎「横臥裸婦」、岩田藤七「光りの美」、川村驥山「酔古堂劍掃語」にきまる。</p> <p>3・一 昭和25年度文部大臣賞、吉岡堅二「楽苑」、三岸節子「山樞」、横江嘉純「大悲に歩む」、信田洋「金工芙蓉置物」にきまる。</p> <p>4・7～5・6 宗達、光琳派展、東京国立博物館主催(光悦・宗達・光琳・乾山・抱一・蘆舟から観山・御舟・紫紅を系統的に並べる)。</p> <p>4・一 月刊誌『Museum』創刊(東京国立博物館)。</p> <p>5・22～6・13 第5回連合展、都美術館に開催、この年で中止(高島達四郎「暮色」・岡鹿之助「遊蝶花」など)。</p> <p>5・一 日本陶彫会、沼田一雅・木内克・加藤顕清・中村直人らを中心に結成。</p> <p>6・7 文化財保護委員会、第1次新国宝181件を決定発表。</p> <p>6・一 伊藤憲治・亀倉雄策・河野鷹思ら日本宣伝美術会結成、第1回展9・10～17 松屋に開催。</p> <p>9・5 サンフランシスコを皮切りに、米国各都市で、日本古美術展を開催。国宝級古美術177点出品。</p> <p>9・8 対日平和条約調印。</p> <p>9・10～17 新制作派協会と創造美術が合同、新制作協会として発足、9・22～10・7 第1回展。</p> <p>10・1 第1回サンパウロ=ビエンナーレ国際美術展(ブラジル)に参加、戦後初の海外出品。(日本画:伊東深水・加藤栄三・東山魁夷・山口蓬春・福田豊四郎・山本丘人ら14名。油絵:猪熊弦一郎、宮本三郎ら17名。彫刻:山本豊市・菊池一雄ら7名。版画:恩地孝四郎ら8名の作品が出品される)。</p> <p>10・一 第二紀会に彫塑部設置。</p> <p>10・一 神奈川県立近代美術館開館記念として「セザンヌ、ルノワール展」を開催。</p> <p>10・一 斎藤豊作没(享年72)、倉垣辰夫没(享年51)。</p> <p>11・17 生活工芸集団結成(型々工芸、木彩会、ココ工芸合同、日展工芸に対抗)。</p> <p>11・一 イサムノグチ作「無」、慶応義塾大学構内に建つ。</p> <p>12・27 法隆寺金堂壁画の模写完成(昭15～、8壁)、落慶法要。</p>	
(1) 第7回日展特選受賞者	<p>日本画 堂本尚郎「鶯のある白い家」、曲子光男「製綱工場」 美術工芸 新開寛山「陶製早春文花瓶」、浅見隆三「磁器鵝頭花之図花瓶」 日本芸術院史</p>		
(2) 第15回新制作協会展(日本画京都関係のみ)	<p>沢宏毅「林」、秋野不矩「裸婦」、向井久万「立像」、菊池隆夫「雲」、奥村厚一「海」、広田多津「裸婦」 日本美術年鑑 昭27</p>		

京	都	府
<p>1・19 洋画家 津田正周没(明40京都生、享年47)。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>2・5～10 京都彫刻家クラブ創立、第1回展を大丸に開催(中堅彫刻家によって組織される。会員は伊室重孝・清水礼四郎・藤庭賢一・藤林重治・河野薫郎・小谷謙・岡本庄三・三宅五穂)。 日本美術年鑑 昭29、日本美術工芸 161</p> <p>2・12～17 勁草会展、大丸に開催(日展の西山英雄・河合健二・高山辰雄、青竜社佐々木邦彦、新制作山本丘人の東西中堅日本画五人展)。 日本美術工芸 162</p> <p>2・一 華敵美術協会、主宰太田喜二郎の死後は、角野判治郎・霜鳥之彦・坪井一男・山田新一の4名を指導者として故人の遺志継承を決定。 日本美術工芸 161</p> <p>3・9 日本画家 栗本一洋没(享年58)。 日本美術工芸 163</p> <p>3・12～19 国盛義篤遺作展、丸物に開催。 同上</p> <p>3・一 昭26年度芸術院賞、山鹿清華「手織綿無心壁掛」(第7回日展出品)に決定。 日本美術年鑑 昭28</p> <p>3・一 京都府美術工芸課所管の府ギャラリー、純然たる画廊に改装。 日本美術工芸 162</p> <p>3・一 昭26年度芸能選奨文部大臣賞(美術部門)に、京都より楠部弥弼が選ばれる(作品は第7回日展出品「白磁四方花瓶」)。 日本美術年鑑 昭28</p> <p>3・一 国立陶磁器試験所廃止(その施設は新たに京都市工芸指導所に転用)。 京焼百年の歩み</p> <p>4・1 恩賜京都博物館、文化財保護委員会の所管となり、京都国立博物館と改称(細川護立文化財保護委員が館長事務取扱となる。4・6 開館。5月神田喜一郎が初代専任館長に任命される。同月、国立移管の記念式典を挙行し、記念展覧会として国有東洋美術名品展を開催)。 京都国立博物館70年史</p> <p>4・1 京都学芸大学に特修美術科〔特別教科(図画・工作)教員養成課程)を設置認可(伊谷賢蔵、西洋画科主任教授に就任。～昭40)。 京都教育大学沿革、伊谷賢蔵自選展目録</p> <p>4・19～24 第1回哉光会展、丸物に開催(東西両本願寺後援。同会は無形文化財に指定されたきりがねの造形性を現代作品に生かすことを主眼とする。永田清高ら)。 日本美術工芸 164</p> <p>5・1 京都美術館、7年ぶりに接収解除となり、直ちに復旧工事に着手。 市美術館年報 昭40、京都 6・11</p> <p>5・2 洋画家 三輪大次郎没(明1新潟県生)。 京都洋画の黎明期 以文会名簿</p> <p>5・11 中井正一没。 以文会名簿</p> <p>5・20～25 第1回錚々展、京都金芸作家協会主催で、大丸に開催(加茂靈峰・村上直行ら)。 日本美術工芸 165</p> <p>6・7～12 第五回関西新制作展(丸物)。 同志社美術 7</p>	<p>6・7～12 第1回前衛作家集団展、丸物に開催(絵画・彫刻・文学の前衛派の総合展で、油絵は美術文化、陶器は四耕会が出品。抽象やシュールレアリスムが圧倒的)。 日本美術工芸 166</p> <p>6・一 仏国陶工クロード=ラール、日本陶器研究のため河井寛次郎に師事(B・リーチの紹介による)。 同上</p> <p>7・1 大礼記念京都美術館、京都市美術館と改称(京都市美術館条例が制定される)。 市美術館年報 昭40</p> <p>7・15 新匠会会員岡田章人・小合友之助・春日井秀雄・山出守二・佐野猛夫ら「会員に止まることの矛盾を感じ…」との声明を発表、同会を脱退。 日本美術工芸167</p> <p>7・一 朝日新聞主催の日本陶芸展が催され、出品数139点・出品者69名のうち京都の出品者は37名に及び、受賞者も10名のうち8名までが京都在住者で占められた。 京都年鑑 昭28</p> <p>8・15 京都・奈良を救った日本美術の恩人Lワーナー博士、フリーヤー美術館長A・G・ウエンリー、メトロポリタン博物館東洋美術部長A・ブリスト両博士と入洛、京都博物館・有鄰館・山中美術館・竹内逸三・河井寛次郎らを訪ね、古美術を鑑賞(23日奈良へむかう)。 日本美術工芸 167</p> <p>8・31 指物師 13代駒沢利斎没(明16生)。 淡交テキスト茶道具編</p> <p>9・1～14 市美術館再開の記念式を勲業館に挙行(再開記念として京都名作展・国際美術展を開催。前者は山元春挙・竹内栖鳳・西村五雲・富田溪仙・土田麦麿・村上華岳・橋本閑雪・上村松園・浅井忠らの遺作を展示)。 京都 9・2、日本美術工芸 168</p> <p>9・21～10・7 第16回新制作協会展<sup>(2)</sup>。 日本美術年鑑 昭28</p> <p>11・27～12・4 太田喜二郎遺作展、市美術館に開催。 太田喜二郎遺作展図集</p> <p>12・11～28 第8回日展京都展(市美術館)<sup>(1)</sup>。 12・一 耕人社、理事長栗本一洋の死により12月限りで解散(耕人社は、山元春挙主宰の早苗会が昭18・1解散後、春挙門下生有志が同年3月に結成したもの)。 日本美術工芸 172</p> <p>この年</p> <p>▷ 染色家 佐野猛夫、日展から離脱し無所属を声明。 日本美術工芸 171</p> <p>▷ 佐藤玄々、妙心寺で弟子を多数使い木彫作品を制作。 京都年鑑 昭28</p> <p>▷ 齋藤真成・中田勇次郎、行動美術洋画部会員に、また藤庭賢一は同彫刻部会友に推挙される。 日本美術工芸 170</p> <p>▷ 6代清水六兵衛作「向日葵皿」、イタリー フェイエンシャー陶器博物館所蔵となる。 清水六兵衛歴代作品集</p> <p>▷ 同志社大文学部文化学科に美学芸術学専攻講座が設置される(主任教授園頼三)。 同志社美術 7</p>	

参	考	日	本
(1) 第8回日展特選受賞者(京都関係のみ)	日本画 麻田弁次「群棲」、加藤美代三「鯊の池」、堂本元次「室内」 美術工芸 内田邦夫「磁製扁壺」	日本芸術院史	1・8 プリジストン美術館開館(石橋正二郎収集の西洋近代美術と日本洋画などを陳列)。 2・一 ピッツバーグ国際美術展(阿部展也・伊原宇三郎・猪熊弦一郎・香月泰男・児島善三郎・三岸節子・宮本三郎・村井正誠・岡本太郎・坂本繁二郎・佐藤敬・須田国太郎・田村一男・脇田和・山口薫・安井曾太郎・吉原治良の作品17点)。 3・29 文化財保護委員会、無形文化財として工芸技術36件を初めて選定(河面冬山・松波多吉・木内省古・加藤土師萌・加藤唐九郎・黄八丈など)。 3・一 第2回松園賞、堀文子「山と池」その他の諸作にきまる。 3・一 昭和26年度文部大臣賞、橋本明治「赤い椅子」、岡鹿之助「遊蝶花」、沢田晴広「五木の精」、楠部彌弼「白磁四方花瓶」にきまる。 3・一 第1回工業デザイン展。 4・一 20世紀傑作展(パリ、文化自由人会議国際委員会主催、日本から日本画・洋画18人出品)。 5・22～6・13 第1回日本国際美術展(毎日新聞社主催、都美術館に開催、米仏等7カ国参加)。 5・一 日本版画院創立(棟方志功ら)。 5・一 第1回国際陶工染織工大会(英国ダーティントン、柳宗理、浜田庄司出席)。 6・一 第26回ビエンナーレ国際美術展(審査員として梅原龍三郎、土方定一、益田信義が出席、日本から11作家22点出品)。 7・3 箱根美術館開館(世界救世主教の建設。昭32・1・2 熱海美術館開館)。 7・一 第4回世界美術評論家会議。日本正式に参加。富永惣一・土方定一正会員となる。 9・20～10・26 ブラック展、東京国立博物館に開催。油絵、彫刻、挿絵、石版画など約100点。 10・一 日本インダストリアルデザイナー協会(JIDA)結成、(剣持勇・柳宗理・金子徳次郎・渡辺力ら25名のデザイナー)。 10・一 昭和28年度文化勲章 梅原龍三郎・安井曾太郎。 12・1 国立近代美術館(京橋)開館、第1回展「日本近代美術展」。
(2) 第16回新制作協会展(日本画京都関係のみ)	沢宏毅「六甲ノ山」、上村松篁「蓮」、秋野不矩「立てる女」、向井久万「あるく」、奥村厚一「雪山」、菊池隆志「裸婦」、広田多津「立像」、麻田鷹司「牛舎」	日本美術年鑑 昭28	この年
▷ 霜鳥之彦、京都学芸大学教授となる。 府ギャラリーニュース 31	▷ このころから西陣でナイロンの使用始まる。 西陣		



京	都	府
2・10～15 堂本印象滞欧スケッチ展(大丸)。 2・17～22 北沢映月第1回個人展、大丸に開催(院展会員の関秀画家、20点展示)。 日本美術工芸 174		9・1 京都青年美術作家集団創立(個展を主とするグループ、毎年2回集団展を開催、市村司ら)。 日本美術年鑑 昭42
3・1 独立美術京都研究所、下京区壬生通七条上ルに開所。 日本美術工芸 175		9・1 日本工人社創立(無形文化財に選定された京都在住の作家が結成。無形文化財として後世に伝える伝承的工芸技術の調査研究を行ない、府教委文化財保護課内におく。顧問:明石染人・荻野二郎・坂田正、幹事:法山竜正、会員:田畑喜八・岡本正太郎・石黒宗磨ら)。 京都年鑑 昭30、日本美術年鑑 昭29、31
3・1 タツムラ(織宝苑)、龍村美術織物(株)の傍系として設立。昭32タツムラシルクマンション(株)となる。 ☆		10・4 清風会、京大の清風荘で結成される(同会は京都博物館を支援するため美術愛好の関西実業家を発起人として結成される)。 日本美術工芸 181
3・24 バーナード=リーチ、17年ぶりに柳宗悦・浜田庄司とともに入浴(25日毎日会館で講演)。 日本美術工芸 175		10・11 文化財保護委員会、昭27春無形文化財に選定された「正藍染」と「本檳榔子染」の技術記録を伊藤富三郎に、また11月に選定された「友禪染」の記録を田畑喜八にそれぞれ依嘱。同上
3・27 財団法人京都陶磁器協会設立(同時に工業組合所属陳列所を設け、業界の啓蒙・宣伝・教育・京焼の陳列販売を行なう。京都陶磁器会館を経営)。 京焼百年の焼み		10・12～11・2 日本名作展、市美術館に開催(同館開館20周年記念展で、岡倉天心を基点とする現代日本画の生成と展開を示したもの。狩野芳崖「大鷲図」、橋本雅邦「瀟湘八景」、横山大観「無我」・「生々流転」、下村観山「弱法師」、菱田春草「落葉」、今村紫紅「熱国の巻」、速水御舟「萌芽」、小林古径「阿弥陀堂」、安田靫彦「孫子勒姫兵」、前田青邨「洞窟の頼朝」など日本画のバック・ボーンを形成した院展系8作家の代表作84点を展観)。 日本美術工芸 182
3・1 羅の製作者喜多川平朗・山本熊太郎、無形文化財に指定される。 京都 4・1		10・21～25 生々会第1回日本画展、府ギャラリーに開催(麻田鷹司・堂本尚郎・西山英雄・高山辰雄・朝倉撰ら)。 同上
4・1 日吉ヶ丘高校、美術課程を美術工芸課程と改称。 京都市立学校園沿革		10・1 須田国太郎、第21回独立展に「走鳥」・「マナヅル」などを出品。 須田国太郎
4・29 開西日展彫塑家協会結成(京都・大阪・兵庫・滋賀・奈良の日展系彫塑家約30名が組織。理事長:松田尚之。事務所:東山区五条橋東5丁目467 清水礼四郎方)。 日本美術工芸 176		11・13 京人形師 4代面竹岡本正太郎(御所人形)・京人形師13代面庄岡本庄三(三ツ折人形)・京友禪師3代田畑喜八(手描き友禪)・京友禪師2代上野為二ら、無形文化財に指定される。 京都 11・14
5・30～6・6 北脇昇遺作展、市美術館に開催(油絵・素描など約100点。「独活」・「空港」・「探索者」・「眠られぬ夜の為に」等のシュールレアリスムの作品を展示)。 日本美術工芸 177		11・25～26 初の文化財保護全国大会、京都古文化保存協会・京都市・文化財協会の共催で、二条城に開催(総裁高松宮殿下をはじめ、文化財所蔵の全国の社寺・博物館・美術館や行政担当者ら約600名が参集。文化財に対する国庫補助金の増額・維持管理費の国庫負担・税金の免除・文化財保護期成同盟の結成・文化財を戦禍からまもる決議案等を採決)。 日本美術工芸 183
5・1 京大新制大学院が発足し、文学研究科に美学理論・東西美術史を包括する美学美術史専攻が設置される。 京都大学70年史		11・28 凶案家 福岡玉隠没。凶案年鑑 1
6・5 京都美術懇話会、カクテルパーティをアラスカに開催(日本画・洋画・彫塑・工芸・鑑賞家など会員約100名が参加して、京都バレエ団のバレエを鑑賞)。 日本美術工芸 177		12・8 わだつみの像除幕式、立命館大で挙(本郷新作ブロンズ像)。 京都年鑑 昭30
6・15 楠部弥弉を中心に伊東奎・市川通三ら16人の新人陶芸家、研究団体青陶会を設立、南禅寺ハウスに発足式を挙(翌29年5・7～11、第1回展を府ギャラリーに開く)。 日本美術工芸 178、日本美術年鑑 昭29		
6・16～21 第1回九耀会展、大丸に開催(富本憲吉・近藤悠三・清水六兵衛らの陶芸展)。 日本美術工芸 178		
6・1 須田国太郎、大山・升田の対局を写生。 須田国太郎		
9・15～20 第1回五合展、大丸に開催(浜田観・西山英雄・麻田弁次・山本倉丘・三輪晃勢らが出品)。 日本美術工芸 181		
9・21～10・7 第17回新制作協会展 <sup>(1)</sup> 。 日本美術年鑑 昭29		

参	考	目	本
(1) 第17回新制作協会展(日本画京都関係のみ) 麻田鷹司「鳥のいる作品」、向井久万「無題」、秋野不矩「坐す」、菊池隆志「姉弟」、沢宏鞆「礁」、奥村厚一「黒潮」、上村松篁「朝」、広田多津「三人」 日本美術年鑑 昭29		1・25～2・25 日本古美術展(国宝・重要美術品を含む絵画77点、彫刻14点。ワシントン国立博物館に開催、以後各地で開催)。	1・1 第4回毎日美術賞、徳岡神泉「池」にきまる。
(2) 第9回日展特選受賞者(京都関係のみ) 日本画 黒光茂樹「青桐」、堂本尚郎「街」、中瀬昂「カンボンアイル(水上部落)」、山本知克「塀に沿う路」 日本芸術院史		1・1 丸木位里、赤松俊子「原爆の図」、国際平和文化賞の金メダルをうける。	1・1 丸木位里、赤松俊子「原爆の図」、国際平和文化賞の金メダルをうける。
		2・1 第3回松園賞、朝倉攝「働く人」その他一連の作にきまる。	2・1 第3回松園賞、朝倉攝「働く人」その他一連の作にきまる。
		2・1 芸術院賞、児玉希望「室内」、沢田晴広「三華」、香取正彦「攀龍虎」、辻本史邑「白詩七律」ら受賞。	2・1 芸術院賞、児玉希望「室内」、沢田晴広「三華」、香取正彦「攀龍虎」、辻本史邑「白詩七律」ら受賞。
		2・1 国際工業デザイン展(シュツットガルト)に日本参加。	2・1 国際工業デザイン展(シュツットガルト)に日本参加。
		3・1 中西利雄遺作展、銀座松坂屋に開催。	3・1 中西利雄遺作展、銀座松坂屋に開催。
		3・1 九里四郎没(享年67)。	3・1 九里四郎没(享年67)。
		4・1 第2回国際現代美術展(ニューデリー)	4・1 第2回国際現代美術展(ニューデリー)
		5・14 洋画家 国吉康雄、ニューヨークで没(明26生、享年59)、昭29・2・20～3・25 遺作展。	5・14 洋画家 国吉康雄、ニューヨークで没(明26生、享年59)、昭29・2・20～3・25 遺作展。
		5・1 近代日本画(日本画の流れ)、国立近代美術館主催。	5・1 近代日本画(日本画の流れ)、国立近代美術館主催。
		6・1 恩地孝四郎、品川工ら20余名、国際版画協会創立。	6・1 恩地孝四郎、品川工ら20余名、国際版画協会創立。
		6・1 日本アブストラクト・アートクラブ結成(長谷川三郎、川口軌外、山口長男ら)。	6・1 日本アブストラクト・アートクラブ結成(長谷川三郎、川口軌外、山口長男ら)。
		6・1 劔持勇、国際デザイン会議に出席。	6・1 劔持勇、国際デザイン会議に出席。
		7・12 日本銅版画協会結成(関野準一郎、浜口陽三、駒井哲郎、浜田知明ら)。	7・12 日本銅版画協会結成(関野準一郎、浜口陽三、駒井哲郎、浜田知明ら)。
		7・1 内田巖没(享年53)。	7・1 内田巖没(享年53)。
		9・1～9・18 第38回院展、都美術館に開催(小倉遊亀「夫人坐像」など)。	9・1～9・18 第38回院展、都美術館に開催(小倉遊亀「夫人坐像」など)。
		9・1 園城寺昇没。	9・1 園城寺昇没。
		10・1～11・15 ルオー展、東京国立博物館に開催(油絵、デッサン、水彩、グワッシュ、エマィユ、版画など計130点)。	10・1～11・15 ルオー展、東京国立博物館に開催(油絵、デッサン、水彩、グワッシュ、エマィユ、版画など計130点)。
		10・1 四人の画家展(中村彝89点、万鉄五郎59点、小茂田青樹44点、土田麦饅41点、国立近代美術館に開催)。	10・1 四人の画家展(中村彝89点、万鉄五郎59点、小茂田青樹44点、土田麦饅41点、国立近代美術館に開催)。
		10・1 香取秀真・板谷波山、文化勲章受賞。	10・1 香取秀真・板谷波山、文化勲章受賞。
		11・29～12・1 第9回日展、都美術館に開催(福田平八郎「雨」など)。	11・29～12・1 第9回日展、都美術館に開催(福田平八郎「雨」など)。
		11・1 洋画家 赤松麟作没(享年75)。	11・1 洋画家 赤松麟作没(享年75)。
		12・1 国際芸術家会議の決議により、国際造形芸術連盟日本委員会が結成される。	12・1 国際芸術家会議の決議により、国際造形芸術連盟日本委員会が結成される。
		12・1 抽象と幻想(非写実絵画をどう理解するか)展、国立近代美術館に開催。	12・1 抽象と幻想(非写実絵画をどう理解するか)展、国立近代美術館に開催。
12・13 第9回日展京都展(市美術館) <sup>(2)</sup> 。			
この年			
▷ 京展再開される。	第5回同展目録		
▷ 鋳鐘家 高橋才治郎没(慶応元生)。	京都の明治文化財		

京	都	府
<p>2・一 古代壁画研究で著名な画家杉本哲郎が中心となり、東山区御陵平林町2番地に東方美術院研究所を創設(岡倉天心が理想とした美術家だけからなる集団村「新しい村」、同研究所は約1万坪の土地を所有し、同人達は果樹園や農場などを経営し、自給自足の生活を送りながら自己の天分を生かそうというのがねらい)。 京都 2・19</p> <p>3・1 特別調達庁が使用していた京都染織会館(中京区四条通烏丸西入)、8年ぶりに一部を除いて全部明渡しの協定が成立し、染織文化センターとして再出発。 京都 3・1</p> <p>4・一 人形研究会創立(辻晋堂指導) 京焼百年の歩み</p> <p>5・11~16 朝日新聞社主催の第1回朝日新人展、高島屋に開催(京都在住の30代までの日本画15・洋画7・彫塑4・工芸13、計39名の新人の招待展、日本画:麻田鷹司・浜田昇児・三輪良平・山本知克・堂本尚郎・三谷青子・山田規代ら、洋画:長野誠之助・大淵陽一、彫塑:野崎一良、工芸山田光ら)。 日本美術工芸 190</p> <p>5・20 日本芸術院賞に京都から金島桂華(日本画)・楠部弥弼(工芸)がえらばれる。 日本芸術院史</p> <p>5・一 京都市工芸指導所、旧国立陶磁器試験所の施設に設立(陶磁器工芸の改良発達をはかる)。 京焼百年の歩み</p> <p>5・一 二科会京都支部結成。 市美術館調書</p> <p>6・27 バウハウス運動の創始者 建築家グロピウス、「バウハウスの理念」と題して、京都アメリカ文化センターで講演(日用品のための標準タイプは文明の最高のレベルであり、それを機械によって大量生産すべきだと強調、来聴のバーナード=リーチは機械生産にいかにして創るもの的心を打ちこむのかと質問)。 日本美術工芸 191</p> <p>7・10 芸術院会員菊池契月の指導で、本年中に平等院鳳凰堂本堂後壁の中品下生観・北壁の中品中生観・南壁の下品中生観の3板壁の模写を行なうことになり、執筆者の下検分が行なわれる(執筆者は松元道夫・多田稜一・河津光俊・安井啓修・吉田友一・川面稜一・入江西一郎・中島卯一郎・林屋源之助ら。8・15 着手)。 日本美術工芸 192</p> <p>8・3 創作権確立協会設立(主宰府美術工芸課。会長和田三造、副会長山鹿清華・田中吉之助・霜鳥之彦、同協会は工芸作家・デザイナーの著作物に対する権利の擁護と著作権思想の普及徹底が目的)。 同上</p> <p>8・20~23 モダンアート京都展、府ギャラリーに開催(山中正二(染)・本野東一(染)・浅田茂(彫)・谷沢秀晃(絵)ら)。日本美術工芸 193</p>	<p>8・25 行動美術の若手、市村司・稲木秀臣・竹中正次・田中守貫ら、京都青年美術家集団を結成(アンデパンダン〔無鑑査制〕展を計画)<sup>(1)</sup>。 市美術館ニュース 27</p> <p>9・10~13 佐々木良三遺作展、府ギャラリーに開催(「蝶」など18点)。 府ギャラリーニュース 38</p> <p>9・15 西陣織物館再開。 西陣織物館記</p> <p>11・6~8 第1回京陶展、京都陶器会館に開催(滝一夫・鈴木清・小川欣二・米沢修・西川実・河合誓徳・林平八郎・今井政之ら京都の陶芸作家・製陶業者のほとんどが出品)。 日本美術工芸 196</p> <p>11・22~26 ゲンビ展、市美術館に開催(非形象と抽象造型を目的とする現代美術懇談会の総合展。絵画の津高一・吉原治良・須田尅太・中村真・吉原通雄、陶器の宇野三吾・林康夫、書の森田子竜・江口草玄らの作品百数十点を展示)。 同上</p> <p>12・12~28 第10回記念日展京都展<sup>(2)</sup>、市美術館に開催。 日本美術年鑑 昭30</p> <p>12・一 八木一夫、東京フォルム画廊に開催の作陶展で、はじめて本格的なオブジェ「ザムザ氏の散歩」を出品。 日本美術工芸 350</p> <p>この年</p> <p>▷ 金島桂華の「冬田」(日本画)・楠部弥弼の「花瓶慶夏」(工芸)、昭28年度芸術院賞に選ばれる。 日本美術工芸 187</p> <p>▷ 京仏師 野崎完慶、師匠から口伝された仏像彫刻の秘法を後世にのこすため、下京区土手町通正面下ルの自宅でテープレコーダーに苦心談を録音(京大人文学研究所に保管されることとなる)。 日本美術工芸 184</p> <p>▷ 京都市工業研究所窯業部、旧国立陶磁器試験所内に移転。 京焼百年の歩み</p> <p>▷ 小合友之助、市立美術大学に勤務(翌年助教授、昭31教授)。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>▷ 堀内正和、鉄熔接彫刻をはじめ。 みづゑ 758</p>	

参	考	日	本
(1)京都青年美術家集団宣言書	前進か後退か!今日青年画家の悩みは一つである。それは如何にして絵画以前の人間性に基き、新しい絵を描くかということである。(中略)それには我々青年が総ての固定意識を超越し真剣な考えと堅実な行動力によって自からを解放することが必要であり、ここに初めて多角な人によって自由に研究し自由に展覧する場所と会を得ることによって絵画の純粋性は維持され発展改革され得るのである。期くして京都に優位なるアンデパンダン達成の磁石になることに誇と自覚を有つ人に依り本会を設立した。	1・一 毎日美術賞、坂本繁二郎「水より上る馬」、山本豊市「女の首」、萩須高德。	1・一 毎日美術賞、坂本繁二郎「水より上る馬」、山本豊市「女の首」、萩須高德。
	京都青年美術家集団の発足にあたって全ての良識ある芸術家の参加と各方面の協力によってこの新しい仕事を時代の要求に基き前進することを誓う。 市美術館ニュース 27	2・一 長谷川路可、伊国のフランシスコ修道院に壁画「日本26聖人」完成。	2・一 長谷川路可、伊国のフランシスコ修道院に壁画「日本26聖人」完成。
		2・一 第4回上村松園賞、小倉遊亀「O夫人座像」。	2・一 第4回上村松園賞、小倉遊亀「O夫人座像」。
		2・一 第7回アンデパンダン展、内田巖の遺作40点特陳。	2・一 第7回アンデパンダン展、内田巖の遺作40点特陳。
		2・一 新日本工業デザイン展、商業デザインを新たに加え産業デザイン展となる。	2・一 新日本工業デザイン展、商業デザインを新たに加え産業デザイン展となる。
		3・7 日米抽象美術展(ニューヨーク)、日本からは山口長男、村井正誠、末松正樹、長谷川三郎ら出品。	3・7 日米抽象美術展(ニューヨーク)、日本からは山口長男、村井正誠、末松正樹、長谷川三郎ら出品。
		3・一 昭和28年度芸術院賞は金島桂華「冬田」、小糸源太郎「春雪」、清水多嘉示「青年像」、山崎覚太郎「三曲衝立」、楠部彌弼「慶夏」。	3・一 昭和28年度芸術院賞は金島桂華「冬田」、小糸源太郎「春雪」、清水多嘉示「青年像」、山崎覚太郎「三曲衝立」、楠部彌弼「慶夏」。
		5・19 建築家グロピウス来日。	5・19 建築家グロピウス来日。
		5・19~6・5 第1回現代日本美術展(毎日新聞社主催、都美術館に開催、山口長男「作品」、「かたち」ほか)。	5・19~6・5 第1回現代日本美術展(毎日新聞社主催、都美術館に開催、山口長男「作品」、「かたち」ほか)。
		5・一 大正期の画家展、国立近代美術館に開催。	5・一 大正期の画家展、国立近代美術館に開催。
		5・一 美術批評家連盟(委員長 土方定一)、結成。世界美術批評家会議の日本支部となる。	5・一 美術批評家連盟(委員長 土方定一)、結成。世界美術批評家会議の日本支部となる。
		6・5 彫刻家 沼田一雅没。 日本芸術院史	6・5 彫刻家 沼田一雅没。 日本芸術院史
		6・一 バーナード=リーチ、富本憲吉、浜田庄司、河井寛次郎四人陶芸展開催(日本橋高島屋)。	6・一 バーナード=リーチ、富本憲吉、浜田庄司、河井寛次郎四人陶芸展開催(日本橋高島屋)。
		6・一 黒田清輝遺作展(国立近代美術館に開催。油絵128点他)。	6・一 黒田清輝遺作展(国立近代美術館に開催。油絵128点他)。
		6・一 平賀亀祐「古いパリの街角」、ル・サロンの金賞およびコロロ風景賞、サンシーニュ・デ・ボザール勲章をうける。	6・一 平賀亀祐「古いパリの街角」、ル・サロンの金賞およびコロロ風景賞、サンシーニュ・デ・ボザール勲章をうける。
		10・15~11・25 フランス美術展(東京国立博物館主催、ルーブル美術館蔵品中心)。	10・15~11・25 フランス美術展(東京国立博物館主催、ルーブル美術館蔵品中心)。
		10・30 花田清輝『アヴァンギャルド芸術』。	10・30 花田清輝『アヴァンギャルド芸術』。
		10・一 岡田謙三、シカゴ・アート・インステチュート展覧会に出品、優秀作品賞をうける。	10・一 岡田謙三、シカゴ・アート・インステチュート展覧会に出品、優秀作品賞をうける。
		10・一 四人の画家展(佐伯祐三35点、前田寛治30点、村上華岳32点、広島晃甫16点、国立近代美術館に開催)。	10・一 四人の画家展(佐伯祐三35点、前田寛治30点、村上華岳32点、広島晃甫16点、国立近代美術館に開催)。
		10・一 青木繁展(ブリヂストン美術館)。	10・一 青木繁展(ブリヂストン美術館)。
		11・一 昭和29年度文化勲章は鍋木清方にきまる。映画「鍋木清方」(ブリヂストン美術館製作)。	11・一 昭和29年度文化勲章は鍋木清方にきまる。映画「鍋木清方」(ブリヂストン美術館製作)。
		この年	この年
		▷ デザインへの関心高まる。モダンリビング展、技術とデザイン展など、昭30・1『リビングデザイン』創刊。	▷ デザインへの関心高まる。モダンリビング展、技術とデザイン展など、昭30・1『リビングデザイン』創刊。
		▷ 日本伝統工芸展誕生(日展工芸と対抗)	▷ 日本伝統工芸展誕生(日展工芸と対抗)

京	都	府
<p>1・15～2・10 フランス美術展（ループル美術館所蔵品）、市美術館に開催（主催朝日新聞社・東京国立博物館。後援京都市。同展は以後の大規模な外国美術展の端緒となる）。 市美術館年報 昭40</p> <p>1・16～20 第1回晨鳥社新人展、府ギャラリーに開催（三輪良平・中路勝博・西内利夫・仁志出高福・林末次ら）。 日本美術工芸 198</p> <p>1・29 東洋特有の焼物天目の製作者石黒宗磨、色絵磁器の製作者富本憲吉、第1次重要無形文化財に指定される。京都 1・28、日本美術年鑑 昭31</p> <p>1・一 須田国太郎、祇園甲部歌舞練場における「能様式による夕鶴・東は東」関西公演に当って美術を担当。 須田国太郎</p> <p>2・8～13 富岡鉄斎・富田溪仙展、大丸に開催（鉄斎「武陵櫻郷」・「古狸沾酒図」・「田家早梅図」、溪仙「蓬萊山」・「翔鶴」などを展示）。 日本美術工芸 199</p> <p>3・8～13 第1回尚院会展、大丸に開催（京都在住の日本美術院の同人、院友の旗上げ展。真道黎明・小松均・浜孤嘯・松尾冬青・松井牧牛ら）。 同上</p> <p>3・23～31 京都アンデパンダン展、市美術館に開催（京都青年美術家集団主催。初の無鑑査展、市村司・青木義照・田中守貫・稲木秀臣・小名木陽一・森清ら。この秋、同集団は、既成団体展への出品をめぐる分裂、不出品反対派は脱退してグループ目撃者を結成する）。 日本美術工芸 200、市美術館ニュース 27</p> <p>3・29～4・3 第1回黒潮会日本画展、大丸に開催（細木成実・野々内良樹・稲田和正・下保昭・川辺隆啓・森公孝・西内利夫ら京都画壇の新人、中堅級20名が出品）。 日本美術工芸 200</p> <p>4・1 京都市立工業研究所廃止され、工芸指導所に統合。 市条例2号</p> <p>4・8～12 青塔社素描展、府ギャラリーに開催（池田遙邨主宰画塾のはじめての披露展、遙邨の街頭、桑野博利の肖像画、佐藤晴行・山本昌平・稲田和正らの風景画など）。 同上</p> <p>4・10 13代面屋庄三、あまがつ(天児会)を設立（永い伝統と平安の気風に培われてきた日本の人形芸術を、新しい感覚で、より高い格調へと研鑽精進すると共に、人格の陶冶をなす。会員は女性）。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>4・15～19 八木一夫陶個展（「単独者」・「風位」・「花器C」・「ザムザ氏の散歩」等を展示）。 日本美術工芸 201</p> <p>4・22 美術工芸界功労者内貴清兵衛没（享年78）。 ☆</p> <p>4・一 日本陶磁協会、はじめての新進作家の表彰に、京都の熊倉順吉、清水卯一、加藤嶺男を選ぶ。 日本美術年鑑 昭31</p>	<p>5・5～8 青樹社の同人9名のいけばな作家による野外作品展を市役所前に開催（石膏や丸太ペンキ塗りの枝などを素材として、立体構成を試みた前衛花道で、街頭装飾として近代建築との調和をねらう）。 日本美術工芸 201</p> <p>5・一 上野為二、重要無形文化財の友禅染技術の保護者に認定される。 日本美術年鑑 昭36</p> <p>6・8 東山高台寺境内に大観音像が、建立される（鉄筋コンクリート製、牧溪の白衣観音をモデルに山崎朝雲が製作、場所柄賛否両論が沸く）。 日本美術年鑑 昭31</p> <p>7・11 日本画家 西村卓三没（明41・1・29京都生享年47）。 同上</p> <p>7・一 稲垣稔次郎、祇園祭パンフレット表紙を描く。 稲垣稔次郎作品集</p> <p>7・一 京都陶芸家クラブ黏土、第1回展を東京大丸に開催（以後毎年1回開催）。 日本美術年鑑 昭31</p> <p>8・一 日本工芸会発足〔昭28・9に結成された日本工人社が発端となり、この組織を全国的に拡大するため同社を解散し、新たに社団法人組織として結実したもの。工芸家の統一組織としてははじめてのもので、京都から（陶芸部門）石黒宗磨・宇野三吾・宇野宗麿・近藤悠三・清水卯一・鈴木清・辻晋六・富本憲吉ら加わる〕。 京焼百年の歩み、日本美術年鑑 昭31</p> <p>9・9 日本画家 菊池契月没（明12・11・14長野生、本名完爾、享年75）。日本美術年鑑 昭31</p> <p>9・一 デザインハウス創立<sup>(1)</sup>（各専門デザイナーの相互の技術とアイデアの交流を計る目的、フォトデザイナー、服飾デザイナー、染織デザイナーなど。昭31・8 第1回展を大丸に開催）。 府ギャラリーニュース 40</p> <p>10・7～11 グループ目撃者第1回展、府ギャラリーに開催（青木義照、石原薫、藤波晃ら7人）。 市美術館ニュース 27</p> <p>10・10 鹿苑寺金閣再建される。 日本美術年鑑 昭31</p> <p>11・一 富本憲吉作陶45周年記念展、東京高島屋に開催（作品を大和・東京・京都時代と分類し、45年にわたる陶歴を回顧）。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>12・13～1・7 第11回日展京都展、<sup>(2)</sup>市美術館に開催。 市美術館と美術品</p> <p>この年</p> <p>▷ 中村鵬生、全日本工芸美術作家協会京都支部長となる。 日本美術年鑑 昭35</p> <p>▷ 3代田畑喜八、重要無形文化財に指定される。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>▷ パンリアル美術協会、西銀座ナビス画廊にはじめての東京展を開催。 京都画壇</p> <p>▷ 菊池契月の死とともに菊池塾解散。同上</p>	

参	考	目	本
(1)デザインハウス同人	<p>浅沼 守（フォトデザイナー）</p> <p>福永 俊吉（装飾デザイナー）</p> <p>中川 脩造（建築デザイナー）</p> <p>河合 玲（服飾デザイナー）</p> <p>鶴見 保（コマmercialデザイナー）</p> <p>佐々木良三（アドプランナー）</p> <p>重成 基（アートディレクター）</p> <p>田中吉之介（染織デザイナー）</p> <p>顧問 霜島之彦</p> <p>後からの参加者 西山 英雄（日本画）</p> <p>伊谷 賢蔵（洋画）</p> <p>浅見 隆三（陶器）</p> <p>堀内 正和（彫刻家）</p> <p>徳力富吉郎（版画）</p> <p>府ギャラリーニュース 40</p>	<p>1・23 法隆寺西園院新堂竣工、これにより21年間にわたった法隆寺昭和修理が終了する。</p> <p>1・27 文化財保護委員会、重要無形文化財技術指定制度第1次指定を内定。2・15告示。</p> <p>4・26～5・1 日本陶磁協会創立10周年記念として、宋磁名品展が、東京高島屋で開かれる。</p> <p>5・20～6・12 第3回日本国際美術展、都美術館に開催。（脇田和「あらそい」など）</p> <p>6・3 装丁家・版画家 恩地孝四郎没（明24生、享年63）。</p> <p>7・2 第3回 サンパウロ=ビエンナーレ 国際美術展に、棟方志功入賞。</p> <p>7・15 一陽会結成（二科会を脱退した鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎ら）。</p> <p>7・23 第1回毎日産業デザイン賞（国井喜太郎、山名文夫、小杉二郎、早川良雄）。</p> <p>8・1 平城京跡の発掘が、奈良国立文化財研究所を中心にはじめられる（この年は10年計画の第1年目）。</p> <p>8・一 日本工芸会結成（松田権六ら、日本伝統工芸展開催）。</p> <p>9・1～9・19 第40回院展、都美術館に開催（前田青邨「出を待つ」、岩橋英遠「壁」など）。</p> <p>9・11～10・20 メキシコ美術展、東京国立博物館に開催。</p> <p>11・4 根津美術館（財）開館、再発足する。</p> <p>12・14 洋画家 安井曾太郎没（明21・5・17京都生、享年67）。昭31・4 遺作展、同12 安井賞設定。 日本美術年鑑 昭31</p>	<p>この年</p> <p>▷ 日本書道展、欧州各地で開催。</p> <p>▷ 昭29年度第6回毎日美術賞、第5回上村松園賞は共に該当作品なく授賞は取りやめとなる。</p>
▷ 割烹用食器の研究会、久楽会が誕生（料理に対する陶磁器の配色、日本・中国・朝鮮の古陶器の研究を行なう。清水六兵衛・叶光夫・三浦竹泉・森野嘉光ら）。 京焼百年の歩み	▷ 森口華弘、日本工芸会正会員となる。 自筆履歴書	▷ 日展系染織・刺繍7名のグループ、びざん誕生。 府ギャラリーニュース 34	

京	都	府
<p>2・7 昭30年度恩賜賞に、京都から龍村平蔵が、日本芸術院賞に日本画からは山口華楊、工芸の清水六兵衛が選ばれる（龍村は染色工芸に与えた功績に対し、六兵衛は第11回日展「玄窯叢花瓶」に対し）。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>2・一 上村松園賞、昭30年度の同賞該当者がなかったため、本年あらためて第5回受賞者を選考し、新制作協会会員広田多津に決定（第19回新制作協会展出品作「大原の女」およびこれまでの業績に対して授与されたもの。なお本賞は5名の受賞者が決定し本年で完了する）。 同上</p> <p>3・一 稲垣稔次郎、イタリー フローレンスの世界工芸展へ草の文様着物を出品。 稲垣稔次郎作品展</p> <p>3・一 井島勉、在外研究員として、アジアならびに欧米各国の美術館・美術研究所の視察調査に出張。 京都大学70年史</p> <p>3・一 須田国太郎、第28回ヴェニス ビエンナーレ展に、「法観寺塔婆」ら13点を出品。 須田国太郎</p> <p>4・7～15 1956年京都アンデパンダン展〔第2回京都アンデパンダン展〕、市美術館に開催。（この回は京都青年美術作家集団、目撃者グループ、大津市の新人洋画グループ孤立地帯、行動美術京都研究所系の新人グループ「ギルクワ」の、4者を構成員とする京都アンデパンダン協議会主催で開く、出品約300点。東京・大阪のグループからも出品、非常に成功をおさめる）。 市美術館ニュース 27</p> <p>4・24 喜多川平朗、羅で重要無形文化財に指定される。また深見重助は唐組で指定される。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>5・23～6・10 安井曾太郎遺作展、市美術館に開催（同館主催、京都市後援、同展は東京の国立近代美術館との企画提携の最初の具体化である）。 市美術館と美術品、市美術館年報 昭40</p> <p>6・20 日本画家 福田恵一没（明28、広島県生、享年61）。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>7・一 石黒宗麿、小山富士夫らと八瀬陶窯財団法人を設立（「生活に困っている若い陶芸家の研究の場に使ってほしい」と私有財産一切を寄付）。 毎日 昭34・4・26</p> <p>8・一 走泥社・創人社・新匠会・モダンアート協会などに属する作家13人、各分野の理解と協力により新しいクラフトを創造することを目標に、現代工芸協会を設立（原照夫、八木一夫、河合紀、山田光ら）。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>9・2～16 菊池契月遺作展、市美術館に開催。 市美術館と美術品</p>	<p>9・13 市条例により、社寺の拝観に観光税課税が実施される（国際観光都市とする財源のため。社側は反対してきた）。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>9・21～10・7 第20回新制作協会展<sup>1)</sup>。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>10・一 府ギャラリー内に産業美術相談室を設置。 美術工芸課事業概況 昭36</p> <p>11・10～24 雪舟展、雪舟没後450年記念行事として京都博物館に開催。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>11・23～29 新人グループ展、市美術館に開催（市が走泥社およびパブリック美術協会を招待したもの）。 市美術館ニュース 27</p> <p>11・25～27 京都工芸繊維大学工芸部図書館、縁故作家洋画展を同所に開催（浅井忠没後50年記念、浅井忠をはじめ同大学に関係ある諸作家の遺作を陳列）。 京都工繊大人文 7</p> <p>12・12～1・6 第12回日展京都展(市美術館)。 12・25 染織家 3代田畑喜八没（明10京都生、享年79）。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>この年</p> <p>▷ 洋画家 芝千秋（明10・3・14生、名千代、日本画もかく）。 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 西山翠嶂、日本芸術院会館建設日本芸術院会員展に「枯葉」を出品。 日本美術年鑑 昭34</p> <p>▷ 榊原紫峰、この年から宇治平等院・醍醐三寶院・山科法界寺で壁画模写の指導にあたる。 榊原紫峰展</p> <p>▷ 皆川月華、府囑託にて海外美術工芸の調査研究のため、アメリカ各地を巡る（約3カ月間、帰国後、京都と東京で発表）。 自筆履歴書</p> <p>▷ 京都商業美術協会発足。 デザイン 66</p> <p>▷ 伝統を守る能面作家のグループ面生会誕生（北沢如竟ら） 府ギャラリーニュース 52</p>	

参	考	目	本
(1)	第20回新制協会展（日本画京都関係のみ） 奥村厚一「淵」、沢宏毅「浄土台」、秋野不矩「裸童」、上村松園「草原八月」、広田多津「坐像」、向井久万「何処へ」 日本美術年鑑 昭32	1・15 昭30年度第7回毎日美術賞に脇田和、福田豊四郎、〔功労賞〕故安井曾太郎らが選ばれる。 2・7 昭30年度恩賜賞並びに日本芸術院賞が発表される（恩賜賞：龍村平蔵、日本芸術院賞：〔日本画〕東山魁夷、山口華楊、〔洋画〕鬼頭鋼三郎、〔工芸〕清水六兵衛、三井義夫）。 3・3 第6回芸術選奨文部大臣賞発表（美術部門：鳥海青児ら）。 4・2 詩人・彫塑家 高村光太郎没（明16生、享年73）。昭32・9 高村光太郎賞設定。 4・28～5・27 雪舟展（没後450年記念、東京国立博物館に開催、11・10～11・24京都国立博物館に開催）。 5・22～6・8 第2回現代日本美術展、都美術館に開催（岡鹿之助「雪の発電所」など）。 6・11 第28回ヴェニス ビエンナーレ国際美術展の日本館（吉坂隆正設計）開館式。6・15棟方志功、大賞受賞発表。 6・一 日仏具象作家協会結成（寺田春弐ら日仏の美術家による）。7月第1回展、昭33・1国際具象派協会と改称。 7・21 第1回シェル美術賞発表（田中阿喜良ほか）、昭32・7 シェルデザイン賞。 11・3 昭31年度文化勲章受賞式挙（坂本繁二郎ら）。 11・24 版画家 旭正秀没（明33・5・6京都生、号泰弘、享年56）。 日本美術年鑑 昭32 12・一 故安井曾太郎の業績をながく記念する事業の一つとして、安井曾太郎記念賞が設定される。 同上	

京	都	府
2・26 日本画家 三宅鳳白没(享年65)。 日本美術年鑑 昭33		11・29 京都から、石黒宗麿・楠部弥弼・近藤悠三・清水卯一・富本憲吉・黒田辰秋ら、皇居仮宮殿の装飾用置物の製作を依頼される。 同上
2・28 京都から徳岡神泉・山鹿清華ら、日本芸術院会員となる。 同上		12・12 市美術館、本年度美術品購入予算200万円で、竹内栖鳳「雨」、小野竹喬「冬日帖」を購入。 市美術館年報 昭40
3・13～19 1957京都アンデパンダン展、市美術館に開催(市主催として開く)。 市美術館と美術品、市美術館ニュース 27		12・18 河井寛次郎、ミラノ トリエンナーレ国際工芸展でグランプリを獲得(作品「扁壺」に対し、なお他に金賞に鈴木表朔「湯筒」、川上治助「二月堂お盆」などが選ばれる)。 日本美術年鑑 昭33
3・25 日本画家 三木翠山没(享年75)。 日本美術年鑑 昭33		12・一 第13回日展 <sup>(2)</sup> 。 日本芸術院史
3・30 京都から宇野宗鑑の辰砂・青磁が、記録作成などの措置を講ずべき無形文化財と認定される。 日本美術年鑑 昭42		この年 ▷ 稲垣稔次郎、日本工芸会正会員となる(昭33・4 同会理事となる)。 稲垣稔次郎作品集 ▷ 河井寛次郎、陶芸40年展を朝日新聞社主催で京都・東京両高島屋に開催。 日本美術年鑑 昭42
3・一 美術文化協会京都支部設置。 市美術館調書		▷ 河井寛次郎、京都民芸使節団をひきいて沖繩に渡島。 同上 ▷ 木村杏園、金沢市の大谷派東本願寺金沢別院山門再建に際し楼上に「瑞竜」を描く。 同上 ▷ 洋画団体 鉄鶏会創立。 日本美術年鑑 昭42
4・5 日本染織図案家連盟、はじめて1957年モードショーを商品陳列館に開催(翌年も)。 図案年鑑 1		▷ 第7回モダンアート協会展、はじめて京都(市美術館)で開催。 府ギャラリーニュース 61 ▷ 春、女流陶芸創立(坪井明日香ら7人により)。 毎日 昭42・3・1 ▷ 大林蘇乃主宰の人形作家グループ艸の実会設立。 府ギャラリーニュース 52
4・一 創人社、創立10年を経て初期の目的を達したと考え、発展的解散、新たに朱玄会を設立(会員：井田宣秋、番浦省吾、伊藤祐司、堂本漆軒ら、6月第1回展開催)。 日本美術年鑑 昭33		
4・一 奈良国立博物館学芸課長 蓮実重康、京大文学部美学美術史講座の助教授となる(昭35教授に昇任、東洋美術史を講義。昭43・3 退官)。 京都大学70年史		
7・一 小牧源太郎、ブラジル サンパウロへ出発(南米各国で巡回個展を開催。昭33・10・10 帰国)。 市美術館ニュース 5		
8・22 日本画家 木村杏園没(享年72)。 日本美術年鑑 昭33		
9・5 美術品購入審査委員規則が制定され、審査委員8人が選任される(この年から美術品購入予算が計上されることになる)。 市美術館年報 昭40		
9・13～20 石崎光瑠・中村大三郎・寮本一洋 遺作展、市美術館に開催。 市美術館と美術品、全京都年鑑 昭34		
9・25～10・7 第21回新制作協会展 <sup>(1)</sup> 。 日本美術年鑑 昭33		
10・20～11・15 京都博物館、開館60周年記念として「平安時代の美術」特別展を開催。 全京都年鑑 昭34		
11・3 昭和32年度文化勲章受章者に、京都から西山翠嶂が選ばれる。 日本美術年鑑 昭33		
11・9 京都市美術館友の会発足(市美術館の外廊団体)。 市美術館年報 昭40		
11・16 『京都市美術館ニュース』が、創刊され第1号を発行。 市美術館ニュース 1		
11・27 日本画家 大河内夜江没(明26山梨県生、享年64)。 日本美術年鑑 昭33		

参	考	日	本
(1)第21回新制作協会展(日本画京都関係のみ) 上村松篁「桃実」、向井久万「転」、秋野不矩「男の像」、沢宏毅「道」、奥村厚一「樹叢」、石本正「樹根と鳥」、広田多津「つぐむ」、菊池隆志「逆光」、麻田鷹司「鹿落山水」 日本美術年鑑 昭33		1・2 熱海美術館開館。 1・13 奈良国立博物館館長 黒田源次没。 4・3 日本画家 小林古径没(明16生、享年74)。昭35・9・30～10・30遺作展、近代美術館に開催。 4・一 墨の芸術展、近代美術館に開催。米国で鉄斎展、前衛書道もさかん。 5・23～6・16 第4回日本国際美術展、都美術館に開催(福沢一郎「埋葬」・海老原喜之助「燃える」・齋藤義重「鬼」など)。 6・15 ロソ国交回復記念として、モスクワ・キエフなどで展覧される日本工芸美術品の出品審査が開始される。 6・15～7・14 第1回東京国際版画ビエンナーレ展、読売会館・近代美術館に開催。アダム(仏)、浜口陽三、もりまなぶら入賞。 6・29 文化財保護委員会、民族芸能・民族資料を系統調査の上、文化財として指定し記録保存することを決定。 6・30 日本画家 川合玉堂没(明6生、享年83)。昭36・5 玉堂美術館開館。 7・9 衆議院文教委員会で、美術行政の有り方が追求される(日展の工芸部門が作品の上からでなく、政治的な動きによって左右されていると指摘され、以後日展改革問題に発展、9・28 日本芸術院からの分離を正式に決定)。 9・16 第4回 サンパウロ=ビエンナーレ 国際美術展で浜口陽三、最優秀賞。 11・1～12・2 第13回日展、都美術館に開催(杉山寧「耿」・高山辰雄「岑」など)。 11・一 皇居仮御殿は外国の使節、国賓の訪問も多く、室内装飾の必要にせまられ、伝統工芸の海外紹介と保護奨励の意味から、重要無形文化財保持者と、これに準じた作家の作品を採用することとなり、19作家に依頼。 12・29 洋画家 椿貞雄没。	
(2)第13回日展特選受賞者 日本画 下保昭「火口原」 美術工芸 清水洋「層容」 日本芸術院史			
			この年 ▷ 昭31年度日本芸術院賞(杉山寧、鈴木千久馬、東郷青児、雨宮治郎、宮之原謙、堀口捨巳、鈴木翠軒ら)。 ▷ 昭31年度芸術選奨文部大臣賞(福沢一郎ら)。 ▷ 昭31年度朝日賞に梅原龍三郎の第30回国画会出品作「富士山図」が選ばれる。 ▷ 昭31年度毎日美術賞に、岡鹿之助・小倉遊亀がえらばれる。

京	都	府
<p>1・21 昭32年度日本芸術院賞に、京都から松田尚之(彫塑、13回日展「女性」ほかに対し)が決定する。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>1・一 高山市長、これまで京博多・土人形・清水人形などと雑多な呼称が用いられていたものに対し、京陶人形と命名。 <small>京焼百年の歩み</small></p> <p>1・一 須田国太郎、ヨーロッパ巡回日本現代絵画展に、「みみずく」以下3点を出品。 <small>須田国太郎</small></p> <p>3・30 日本画家 西山翠嶂没(明12・4・2京都生、享年78)。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>4・1 独立美術協会京都支部設置。 <small>市美術館調書</small></p> <p>4・1 市美術館友の会の児童美術教室が発足、開講する。 <small>市美術館年報 昭40</small></p> <p>4・29 文人連合会(余技の同好者からなる)、宇多野陽明主庫に中国古書画展とともに開催される。 <small>全京都年鑑 昭34</small></p> <p>4・一 府・市の協力により、京都陶磁器意匠保護協会設立。 <small>京焼百年の歩み</small></p> <p>4・一 美工窓園結成(市立美術工芸・絵画専門・美術大学の各校の卒業生で、陶芸に従事している人々の集団)。 <small>同上</small></p> <p>4・一 京陶人形展、丸物画廊に開催(人形研究会主催、市後援、以後毎年秋開催)。 <small>同上</small></p> <p>5・1～14 第10回記念京展(市美術館)。</p> <p>6・26 日展作家の組織する書作家協会新発足。 <small>京都年鑑 昭34</small></p> <p>7・10 京都府陶工公共職業補導所を、京都府陶工職業訓練所と改称(同所は昭44・10・1さらに京都府立陶工専修職業訓練校と改称)。 <small>同所事業概要 昭45</small></p> <p>7・11 日本画家 水田竹圃没(明16・2・14大阪生、享年75)。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>9・22～10・10 第22回新制作協会展<sup>(1)</sup>。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>10・10 新制作協会、日本画部々員岩崎鐸・洋画部々員川端実の両名を、協会活動に反する旨をもって除名処分にする。 <small>同上</small></p> <p>10・21～11・3 川合玉堂遺作展、市美術館に開催。 <small>市美術館と美術品</small></p> <p>10・一 朴土社、西山翠嶂青甲社解散のあとをうけて結成される(次いで昭34・2牧人社が結成される)。 <small>京都年鑑 昭35</small></p> <p>11・3 龍村平蔵、織物研究で、昭33年度の紫綬褒章を受章。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>この年</p> <p>▷ 陶芸家 4代中村東洸没(明6生、名仁王郎)。 <small>京都の美術工芸100年展目録、京都工芸大観</small></p>	<p>▷ 洋画家 三井文二没(明26香川県生、享年55)。 <small>京都洋画の発展展目録</small></p> <p>▷ 西山翠嶂、京都能楽堂壁画「東山春月」を描く。また京都歌舞練場の依頼により「東山春宵」を執筆、未完に終わる。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>▷ 春、菊燿会結成(白甲社に参加しなかった塾の先輩格にあたる堀井香坡・木村斯光・松元道夫・野添平米ら特選作家を中心に26名が結成する主宰者のない研究グループ)。 <small>京都画壇</small></p> <p>▷ 昭33年度における工芸技術資料買収、京都関係は次のとおり、</p> <p>イ、重要無形文化財保持者では石黒宗麿の「黒釉褐斑鳥文鉢」・「黒釉褐斑鳥文壺」・「木葉天目茶碗」の3点、富本憲吉の「色絵金銀彩八角節筥」・「色絵金彩皿」の2点、喜多川平朗の「羅」、深見重助の「唐組平緒」の各1点。</p> <p>ロ、保持者に準じる者では稲垣稔次郎の「結城紬地型絵染着物一竹林」・「信州紬地型絵染着物一風」の2点、森口華弘の「訪問着一早春」1点。 <small>日本美術年鑑 昭34</small></p> <p>▷ 河井寛次郎、木彫で牛、人物像、動く手、動く足、面などを造る。またこれらで陶土の原型をつくる。一方幾何学的貼付陶文の試作、色釉を使った打葉の手法を始む。 <small>日本美術年鑑 昭42</small></p>	

参	考	日	本
(1)第22回新制作協会展(日本画京都関係のみ)	石本正「根漚」、麻田鷹司「青銅風景」、上村松篁「星五位」、広田多津「舞妓」、向井久万「樹下」、秋野不矩「風景」、沢宏毅「潤」、奥村厚一「大台の山」 <small>日本美術年鑑 昭34</small>	2・26	日本画家 横山大観没(明1生、享年89)、昭34・9遺作展。
		3・22	日展運営会解散、社団法人日展として再発足、11・2～12・8第1回展。
		4・15～昭34・2・一	欧州巡回日本古美術展開催(パリ、ロンドン、ローマなど)。
		4・22	礪山美術館(荻原守衛記念、今井兼次設計、長野県穂高町)開館式。
		5・5	「原爆の子の像」除幕式、広島市内平和記念公園に挙行(菊池一雄作)。
		5・15～6・2	第3回現代日本美術展(鳥海青児「ピカドール」、岡田謙三「元祿」など)。
		5・一	豊道春海ら書道代表団訪中。
		8・一	ソ連で日本工芸美術展。
		10・14～11・25	ゴッホ展、東京国立博物館に開催。
		10・28	舞台美術家協会発足(会長伊藤嘉朔)。
		10・一	北京で光琳展。
		10・一	『現代芸術』(記録芸術の会、～昭36・10)創刊。
		12・29	洋画家 石井柏亭没(明15生、享年76)。



京	都	府
1・15 須田国太郎、昭33年度毎日美術賞を受賞（関西画壇の向上に長期間にわたってつくした功績に対し）。 日本美術年鑑 昭35		回プレミオリソーネ美術展で、堂本尚郎が第2位特別賞を受賞（同展は前衛美術に限定された国際ビエンナーレ展）。 日本美術年鑑 昭35
1・21 染織家 中村鶴生没（明39・10・2 京都生、名成之助、享年52）。 日本美術年鑑 昭35、京都工芸大観		10・一 八木一夫、ベルギーのオステンド市に開催の第2回国際陶芸展で金賞を受賞。 同上
1・25 陶芸家 米沢蘇峰没（明30・8・1 石川県生、名時一、享年61）。 同上		10・一 北大路魯山人書道芸術個展（京都美術倶楽部）。
1・27 染織家 明石染人没（明20・5・6 京都生、名国助、享年71）。 日本美術年鑑 昭35		11・1～23 横山大観遺作展、市美術館に開催。 市美術館と美術品、京都年鑑 昭36
3・25～4・16 「一千年の京都を中心とする日本文化展」（市美術館）。		12・一 池大雅美術館（財）開館。 日本美術年鑑 昭42
3・28 昭33年度第29回芸術選奨に、美術の上村松篁・建築の大江宏が選ばれる（松篁の受賞は新制作展の「星五位」で日本の伝統と革新の調和をなした功績に対するもの、4・6 授賞式を文部省に挙行）。 日本美術年鑑 昭35		12・一 ケラ美術協会創立（若い新制作の画家が大挙して、同会を飛び出し創設したもの、宣言書は「20世紀後半は宇宙時代だ。地球上の争いのごとき、宇宙から見れば夫婦ゲンカに過ぎない。まして日本の、しかもこの京都の中の画壇の動きにいたっては、まるで大海に浮かぶ水泡のようなもの…(略)」。会友は船越修はじめ楠田真吾・岩田重義・松井祥太郎・榊健・物部隆一・野村久之・名合孝之・西井正樹・久保田竜重郎・中塚弘の11人、これにパンリアルの浜田泰介、日展の中尾一郎が加わる）。 毎日 昭36・8・27、京都画壇
4・7～12 第1回光風会京都グループ展、大丸に開催。 朝日		<b>この年</b> ▷ 河井寛次郎、ミラノ トリエナーレで、グランプリを受賞（花文菱形扁蓋）。 昭43・9・27
4・27 洋画家 佐々木良三没（明42京都生、享年53）。 日本美術年鑑 昭38		
4・一 独立美術京都研究所全焼。 須田国太郎		
4・一 高山市長のパリ・ボストン訪問に際し寄贈される美術品が市役所で展示される（富本憲吉・楠部弥弼・清水六兵衛・辻本幾治郎ら）。 京都 4・28		
5・1 金鳥桂華、日本芸術院会員となる。 日本芸術院史		
5・22～6・3 福田平八郎自選展、朝日新聞社主催で東京松屋に開催（大10年代からこれまでの画業を展覧する最初の自選展で、自選代表作60余点を展覧）。 日本美術年鑑 昭35、京都年鑑 昭35		
8・1 陶芸家 清水六和没（明8・3・6 京都生、5代六兵衛、享年84）。 日本美術年鑑 昭35、京都工芸大観		
9・9 国際教育学会議に出席中の美術関係者、約30名、市立美術大学を視察。 市立美術大学研究紀要 1960・7		
9・22～10・10 第23回新制作協会展 <sup>(1)</sup> 。 日本美術年鑑 昭35		
9・一 府ギャラリー、改めて府ギャラリー運営委員会を結成（委員長：井島勉、日本画・洋画・工芸各2人、彫刻1人、デザイン1人、鑑賞者1人の合計10名から成る。事業計画を毎年企画検討）。		
10・一 日展系の作家からなる黒潮会、解散。 京都年鑑 昭36		
10・一 北イタリアのリソーネ市に開催の第11		

参 考	日 本
(1)第23回新制作協会展（日本画京都関係のみ） 麻田鷹司「石水」、石本正「つる」、上村松篁「鶴」、秋野不矩「州」、向井久万「草原」、菊池隆志「雷雲」、奥村厚一「浜」、沢宏靱「あみもんがら」、広田多津「華」 日本美術年鑑 昭35	1・3 洋画家 和田英作没（明7生、享年84）。 5・9～6・2 第5回日本国際術美展（海老原喜之助「蝶」、中谷泰「陶土」）。 6・10 国立西洋美術館開館（上野、ル=コルビュジェ設計、松方コレクションを収蔵）。昭35・5・14～7・10名作選抜展。 9・1～9・20 第44回院展（奥村土牛「鳴門」・岩橋英遠「蝕」など）。 10・一 『デザイン』創刊（美術出版社）。 11・1 第2回日展（東山魁夷「暮湖」）。 12・21 陶芸家 北大路魯山人没（明16・3・23 京都生、名房次郎、享年76）。 日本美術年鑑 昭35

京	都	府
<p>2・1 仏国文化担当相アンドレ＝マルロー、京都を訪れ古美術を見学。 京都年鑑 昭36</p> <p>2・12～16 ZEROの会誕生、第1回展を府ギャラリーに開催(若い画家の国又宏・藤波晃・関根勢之助・森本岩雄、彫刻家の上田弘明・三宅五穂・井上平八郎・宮永理吉、同志社大助教授土肥美夫、評論家津山昌、「種々のジャンルの交流によって現代の共通の問題を論じ芸術の新しいリアリテを追求する集り」である)。 市美術館ニュース 27</p> <p>3・2 岸本景春、刺繍「湖面の面影」(第2回新日展出品作)によって、昭34年度芸術院賞をうける。日本画では池田遙邨が受賞。 京都年鑑 昭36、日本美術年鑑 昭36</p> <p>3・4 綾部市、丹波焼コレクションの管理団体として、重要民俗資料の指定をうける。 官報 3・4</p> <p>4・3～24 梅原龍三郎画業50年記念展、読売新聞社主催で、市美術館に開催(明41から近作に至る110点余を集めた梅原芸術の全貌を示す大展覽会、5・3～15 東京高島屋に開催)。 日本美術年鑑 昭36、市美術館と美術品</p> <p>4・6 醍醐寺五重塔の再建。成る。 日本美術年鑑 昭36</p> <p>4・19 喜多川平朗、重要無形文化財に指定される(平安時代の技術を伝える有職織物の第1人者、また正倉院古代裂の模造に従事)。同上</p> <p>4・19 佐藤玄々作天女像の除幕式、東京日本橋の三越本店に挙行(高さ10.91m木像)。同上</p> <p>5・8 社団法人日本南画院結成式、松田文相、松林桂月ほか全国南画家300名が集まり、上京区相国寺に挙行される(名誉会員松田文相ら17名・会員85名・準会員500名で組織し、南画復興をめざし毎年東京・大阪・京都で作品発表を行なうことをきめ、松林桂月を会長に選ぶ)。 日本美術年鑑 昭36、京都年鑑 昭36</p> <p>8・18 広隆寺国宝弥勒菩薩の指、京大生により損傷。 京都 8・20</p> <p>9・4 染織家 上野為二没(明34・4・16京都生、享年59)。 日本美術年鑑 昭36</p> <p>9・11～10・23 市美術館第一回常設展(平常陳列)。 市美術館と美術品</p> <p>9・22～10・10 第24回新制作協会展<sup>(1)</sup>。 日本美術年鑑 昭36</p> <p>11・6～27 小林古径遺作展(市美術館)。</p> <p>11・1 清水焼デザイン研究会創立(会長辻晋六。京都陶磁器協会と京都市のあつ旋により、業界青年層の新しい京焼デザインを指導研究するのが目的。毎月陶磁器会館で、業界・学界の専門家</p>	<p>を講師に招き研究講習会を開催)。 京焼百年の歩み</p> <p>この年</p> <p>▷ 京都伝統陶芸家協会創立(京都の伝統陶芸発展のため旧技術保存作家により結成されたもの、永楽善五郎ら)。 京焼百年の歩み</p> <p>▷ 染織家 鳥居栄太郎没(明3・9・5京都生)。 明治美術名作展目録</p> <p>▷ 陶芸家 大丸北峰没(明12・9・19石川県生、名谷理吉)。 京都工芸大綱</p> <p>▷ 釜師 13代大西浄中没(享年73)。 淡交テキスト茶道具編</p> <p>▷ 上野為二の着物「寿山の曙」が買上げとなる。 自筆履歴書</p> <p>▷ 女流陶芸第1回展、大阪で開催。 毎日 昭42・3・1</p> <p>▷ 中川伊作、現代版画研究のため米国にわたる。 自筆調書</p> <p>▷ 第1回KSKインテリアデザインコンクール開催(京都室内装備設計士協会)。 府ギャラリーニュース 24</p>	

参	考	日	本
(1)第24回新制作協会展(日本画京都関係のみ)	石本正「ふらみんご」、広田多津「座」、沢宏毅「篁」、奥村厚一「釈迦岳」、秋野不矩「人物」、上村松篁「熱帯睡蓮」、麻田鷹司「崑」、菊池隆志「立像」、向井久万「叉手」 日本美術年鑑 昭36	3・10 大阪四天王寺壁画(中村岳陵・山下摩起)開眼法要。	4・18 五島美術館開館(吉田五十八設計、五島慶太収集の美術品)。
		5・10～21 第4回現代日本美術展、都美術館に開催(斎藤義重「作品R」、堂本尚郎「作品60一I」、麻田鷹司「雲畑那智」など)。	5・11～20 世界デザイン会議(産経会館ほか)、これと平行して5月世界グラフィックデザイン展(三越)など開催。
		5・28 前田青邨ら訪中美術使節団出発(北京・上海で現代日本画展開催、7・1帰国)。	8・1 集団現代彫刻結成(小野忠弘・建島覚造・向井良吉ら)9月第1回展。
		10・2～11・6 日本国宝展、東京国立博物館に開催。	10・15 大阪デザインハウス開館。
		10・15～12・11 20世紀フランス美術展、西洋美術館に開催。絵画・タピスリーなど。	11・5～12・4 第2回東京国際版画ビエンナーレ展、近代美術館に開催(菅井汲「雷」、池田満寿夫「女、動物たち」、萩原英雄「悪の華」など)。
		この年	▷ 昭34年度毎日芸術賞受賞者、海老原喜之助。
			▷ 昭34年度芸術選奨受賞者、山口薫(洋)。
			▷ 昭34年度日本芸術院賞受賞者、恩賜賞：田中親美、芸術院賞：各務鉦三(工)・岸本景春(刺)・松本芳翠(日)・池田遙邨(日)・郷倉千鶴(日)・大久保作次郎(洋)。

京	都	府
1・3～29	20世紀フランス美術展、市美術館に開催。	11・3 陶芸家 富本憲吉、日本画家 福田平八郎、堂本印象、文化勲章を受賞。 <small>日本美術年鑑 昭37</small>
1・17	伊谷賢蔵の「阿蘇」(行動美術展出品)が、文部省の昭35年度買上げ作品に選ばれる。 <small>日本美術年鑑 昭37</small>	12・18～1・7 洋画家 須田国太郎(明24・6・6 京都生、享年70、真如堂に葬る)。 <small>須田国太郎、日本美術年鑑 昭37</small>
2・3～7	京都・パリ友情盟約に基づく文化交流事業として、京都・パリ交歓陶芸展が市美術館に開催(5・17～6・8 仏国ではセーブル製陶所付属博物館に開催。出品者、浅見隆三・石黒宗磨・伊東陶山・宇野三吾・永楽善五郎・叶光夫・河合卯之助・河井寛次郎・清水洋・清水六兵衛・楠部弥弼・近藤悠三・清水卯一・鈴木治・鈴木清・滝一夫・富本憲吉・福田力三郎・三浦竹泉・八木一夫・森野嘉光)。 <small>同展目録</small>	12・一 国画会京都連絡所設置。 この年 ▷ 富本憲吉作陶50年記念展東京高島屋に開催。 <small>日本美術年鑑 昭39</small> ▷ 榊原紫峰、市立美術大学教授を退職。 <small>榊原紫峰展</small> ▷ 富本憲吉・河井寛次郎らの作品の常時陳列施設として大原美術館に陶器館が設けられる。(浜田庄司、バーナードリーチも)。 <small>日本美術年鑑 昭42</small> ▷ 第1回京都市府伝統産業優秀技術者作品展、朝日会館ホールに開催。 <small>同展目録</small>
3・20	彫刻家 清水礼四郎没(大4・9・18 京都生、清水六和の4男、享年45)。 <small>日本美術年鑑 昭37</small>	
4・14	昭35年度第17回芸術院賞に、西山英雄(第3回日展出品作「天壇」)・皆川月華(同日展の染彩「濤」)が選ばれる。 <small>日本美術年鑑 昭37</small>	
5・8	文化財保護委員会、京都国立博物館長に塚本善隆(元京大教授・文学博士)を任命。 <small>同上</small>	
5・一	京人形作家 岡本庄三、京都市の援助の下に、伏見区深草正覚町の京都市工芸指導所内に京都彫刻美術研究所を開く(同研究所は彫刻家の育成を目的とし、塑造・デッサンなど彫刻の基礎を教える)。 <small>京都 4・19</small>	
6・16	宇田荻邨、芸術院会員に決定(昭34芸術院会員選挙のとき金島桂華と票をわけあい保留会員になった宇田荻邨は、同院第1部美術の会員による投票の結果正式に新会員となる)。 <small>日本美術年鑑 昭37、京都年鑑 昭37</small>	
7・11～30	京都・パリ交歓のフランス陶芸展、市美術館に開催。 <small>市美術館と美術品</small>	
7・一	京都伝統彫刻家協会設立(高橋慶岳・田中文弥ら)。 <small>府ギャラリーニュース 12</small>	
8・一	全国商業美術家連盟発起人会、京都で開催。 <small>デザイン 46</small>	
9・一	ポスター・ギャラリー、河原町に誕生(デザイン専門)。 <small>デザイン 43</small>	
10・1～22	京都の日本画一戦後16年の歩み一展、市美術館に開催。 <small>市美術館と美術品</small>	
10・1	『府ギャラリーニュース』第1号発行。 <small>府ギャラリーニュース 1</small>	
10・26～11・15	京都市主催第1回彫刻野外展、植物園に開催(彫刻家41人、作品51点、松田尚之・矢野判三・辻晋堂ら)。 <small>同上</small>	

参	考	日	本
○第25回新制作協会展(日本画京都関係のみ)	「水辺」石本正、「海角」麻田鷹司、「水辺」上村松篁、「女たち」秋野不矩、「坐臥」向井久万、「娘」広田多津、「潮騒」奥村厚一、「氷雪の壁」菊池隆志 <small>日本美術年鑑 昭37</small>	1・一 イタリア現代彫刻展、高島屋に開催。	1・一 ル=コルビュジェ東京展、西洋美術館に開催。
		4・一 アフリカ芸術展、西武に開催。	5・10～30 第6回日本国際美術展、都美術館に開催(向井良吉「蟻の城」など)。
		6・10 ユーゴ国際版画ビエンナーレ展で浜口陽三・菅井汲入賞、9月ユーゴ国際シンポジウムに田中栄作・富樫一入賞。	9・12～17 円空彫刻展、東横に開催。
		9・20 第6回サンパウロビエンナーレ国際美術展で斎藤義重、外国賞受賞。	10・一 クレー展、西武に開催。
		10・一 ピカソ版画展、白木屋に開催。	11・一 フランス美術展、東京国立博物館に開催。
		11・一 サントリー美術館開館。	この年 ▷ 現代工芸美術家協会結成。 ▷ 昭35年度毎日芸術賞受賞者、中村岳陵。 ▷ 昭35年度芸術選賞受賞者、片岡球子・亀倉雄策。 ▷ 昭35年度日本芸術院賞受賞者、恩賜賞 川崎小虎(日)、芸術員賞 岩田正巳(日)、西山英雄(日)、新道繁(洋)、田崎広助(洋)、堀進二(佐治正(漆)、皆川月華(染)、安東聖空(書)、中村蘭台。 ▷ 河村喜太郎、愛知より鎌倉に移る。

京	都	府
1・26～3・15	ルーヴルを中心とするフランス美術展、市美術館に開催（フランス近代の有名作品を多数おりこんだ480点の大展覧、西日本各地から観客を呼び入場者は70万人をこえる）。 京都年鑑 昭38	予算300万円を組むことを表明。 京都 9・4
1・1	美術村、北白川琵琶町に完成、店開きをする（ケラ美術協会の若い画家・彫刻家らにより設立された集団アトリエ。楠田信吾・岩田重義・中尾一郎・榊健一ら10人）。 京都 1・3、毎日 昭36・8・27	<b>この年</b> ▷ 洋画家 国松桂溪没（明17滋賀県生、名金左衛門）。 京都洋画の発展展目録 ▷ 伊庭伝治郎、市立美術大学教授となる。 日本美術年鑑 昭43 ▷ 洋画家 錦義一郎没（明31朝鮮生）。 京都洋画の発展展目録 ▷ 榊原紫峰、日本芸術院恩賜賞を受ける。 榊原紫峰展 ▷ 八木一夫、第3回国際陶芸展（チェコスロバキヤ、プラハ）に出品、金賞をうける。 八木一夫経歴
2・1	京都から清水六兵衛・楠部弥次、日本芸術院会員となる。 日本美術年鑑 昭42	
3・1	稲垣稔次郎、型絵染の技術に対して重要無形文化財保持者の指定をうける。 日本美術年鑑 昭39、稲垣稔次郎作品集	
3・1	蓮実重康、北欧美術の研究と日本美術の講義のためデンマークとドイツへ出張（昭40・12～41・7まで、日中美術の講義と東洋美術に関する調査のため欧米各国、中国へ出張）。 京都大学70年史	
4・1	京都版画家集団結成。 市美術館調書	
4・6～19	現代美術京都秀作展、京都新聞社主催で市美術館に開催。 市美術館と美術品	
4・11	織物工芸家 初代龍村平蔵没（明9大阪生、享年85）。 日本美術年鑑 昭38	
4・24	陶芸家 河合栄之助没（明26・4・24生、享年69）。 同上	
4・27	洋画家 佐々木良三没（享年53）。 同上	
5・8	京都から榊原紫峰(恩賜賞)、三輪昶勢(芸術院賞)受賞。 日本美術院史	
5・31	画家 須田国太郎の遺族から、京展出品作品に対する須田賞賞金に充当する資金として50万円の寄付をうけ、この管理運営のため京都市美術館基金条例が制定される。 市美術館年報 昭40	
6・1	富本憲吉、東山区山科御陵に移る。（この年の作品に、「金銀彩四辨花飾筥」〔イタリー、ローマ・アカデミー蔵〕・「金銀彩描きおこし四辨花文蓋附飾壺」〔文化財保護委員会蔵〕などがある）。 日本美術年鑑 昭39	
7・18～22	第1回仏像彫刻展、府ギャラリーに開催（京都伝統彫刻家協会19人による）。 府ギャラリーニュース 12	
7・20	グループ 生発足（田中猛夫・水野一ら）。 市美術館調書	
7・25	壬生寺焼失。 京都 7・26	
9・2	重文妙心寺鐘持焼失。 京都 9・3	
9・3	知事、重要文化財保護のため府独自で	

参	考	日	本
○第15回京都府工芸美術展審査員 （染）小合友之助・佐野猛夫・皆川月華・皆川泰蔵・山鹿清華 （陶）浅見隆三・清水六兵衛・清水洋・楠部弥次・鈴木清・滝一夫・森野嘉光 （漆）久保金平・堂本漆軒・番浦省吾 （学）井島勉・小野竹喬・竹内逸三・中沢良夫・松田尚之・和田三造 府ギャラリーニュース 4		3・22	洋画家 児島善三郎没（明26生、享年69）。 4・4 第7回ルガノ国際版画展に萩原英雄・吉田穂高入賞、6・14 第13回ベニスビエンナーレ展に菅井汲入賞。 5・9～5・22 第5回現代日本美術展、都美術館に開催（渡辺学「魚、人」、福沢一郎「靈歌」、今井俊満「Pleine Soleil」、小林和作「早春の山」、村井正誠「黒い線」、深沢幸雄「生」など）。 9・1 第47回院展、中村貞以「露」など。 9・1 ミロ版画展、西洋美術館に開催。 10・1 岡倉天心展、松坂屋・芸大に開催。 10・6～11・11 第3回東京国際版画ビエンナーレ展、近代美術館に開催（加納光於「星、反芻学」、池田満寿夫「動物の婚礼」など）。 11・1 ピカソ「ゲルニカ」展、西洋美術館に開催。
○第26回新制作協会展（日本画京都関係のみ） 石本正「冠鶴」、麻田隆司「嶮森」、上村松篁「鳩の庭」、向井久万「金簪屏風」、広田多津「白い華」、沢宏毅「歴層」、菊池隆志「砂丘月映」 日本美術年鑑 昭38			

京	都	府
<p>1・19～2・12 須田国太郎遺作展、市美術館に開催（主催、市・国立近代美術館・須田国太郎遺作展委員会、初期から晩年までの代表作140余点を展観、須田のはじめての大規模な回顧展、2・19～3・21 東京国立近代美術館に開催）。 市美術館と美術品、日本美術年鑑 昭39</p> <p>3・1 国立近代美術館京都分館、岡崎公園内に設立される（元京都勅業館別館を改装、工芸を中心とする特色ある近代美術館として発足。4月の開館に先立ち国立近代美術館次長今泉篤男が初代館長に就任）。 日本美術年鑑 昭39、国立近代美術館京都分館年報 昭38</p> <p>3・8 陶芸家 沢田宗山没（明14・5・31京都会生、名誠一郎、享年81）。 日本美術年鑑 昭39、京都工芸大観</p> <p>3・31 社寺文化資料保護に府独自の補助金を交付。 京都 4・1</p> <p>4・1 日本図案家協会（社）設立、（日本染織図案家連盟解消、昭41・7 現在、正会員516名、うち京都が433名を占める）。 図案年鑑 1</p> <p>4・2 第6回高村光太郎賞（造型部門）は堀内正和の彫刻「海の風」（二科会展出品）が受賞する。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>4・20 昭37年度第13回芸術選奨（美術部門）は、陶磁の山田喆が受賞する。 同上</p> <p>4・28～5・26 国立近代美術館京都分館開館、第1回展として、「現代日本陶芸の展望」ならびに現代絵画の動向」を開催。 国立近代美術館京都分館年報 昭38</p> <p>5・7 美術史家 小林太市郎没（明34・12・27 西陣生、享年61）。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>5・15 昭37年度第19回日本芸術院恩賜賞・芸術院賞の授賞式挙行、京都からは恩賜賞に陶磁の河村蜻山（帝・文・日展に出品し工芸界に尽した功績）、芸術院賞に漆芸の番浦省吾（第5回日展出品「象潮」、陶磁の森野嘉光（第5回日展出品「塩釉三足花瓶」）が選ばれる。 同上</p> <p>6・1 日本クラフトコミッティー京都支部設置。 市美術館調書</p> <p>6・8 陶芸家 富本憲吉没（明19・6・5 奈良県生、享年78、奈良県安堵村円融院に葬る）。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>6・10 染織家 稲垣稔次郎没（明35・3・3 京都生、享年61、鳥辺山通妙寺に葬る）。 日本美術年鑑 昭39、稲垣稔次郎作品集</p> <p>8・25～28 第1回染色集団の展、府ギャラリーに開催。 府ギャラリーニュース 25</p> <p>9・7～11 錦義一郎遺作展、府ギャラリーに開催。 府ギャラリーニュース 25</p>	<p>9・14 彫刻家 佐藤玄々没（明21・8・19 福島県生、名清蔵、旧号朝山、別号阿咩洞、享年75）。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>9・20～29 徳岡神泉回顧展、東京日本橋高島屋に開催（明44から今日まで、50余年に亘る画業の代表作60余点を展示）。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>9・一 村上華岳の芸術展、国立近代美術館京都分館に開催。 京都年鑑 昭40</p> <p>10・15～11・16 工芸における手と機械展、国立近代美術館京都分館に開催（機械量産品としての陶磁器・漆器・ガラス金属器具・家具・照明・染織からミシン・冷蔵庫・テレビなども展示）。 国立近代美術館京都分館年報 昭38</p> <p>10・23～11・23 鎌倉時代の美術展（京都博物館）。 京都国立博物館70年史</p> <p>10・24～31 ケラ美術展、市美術館に開催。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>11・3～27 国画創作協会回顧展、市美術館に開催（同展は大7創立以来、京都画壇における日本画の革新運動を興しながら解散に至るまでの、同会10年間の歩みを回顧、展望するのがねらい）。 市美術館と美術品、日本美術年鑑 昭39</p> <p>11・5 陶芸家 石黒宗麿、昭38年度文部省の紫授褒賞の受賞決定。 日本美術年鑑 昭39</p> <p>11・15 府立総合資料館開館式を下鴨半木町の同館で挙行（京都に関する資料等を総合的に収集、保存し、一般の調査研究に資するため、これを閲覧展示することを目的」として設置されたもの、展示室では11・16～12・22、吉川観方コレクションの風俗変遷展を開催）。 しりょうかん 1</p> <p>12・15～1・25 北大路魯山人の芸術（近代美術館）。 同展目録</p> <p>12・20 須田国太郎著『近代絵画とレアリズム』、中央公論美術出版から刊行。 同書</p> <p>12・20 京都市クラフトセンター、五条坂に開設（伝統産業の近代化、機械生産における手わざの良さを指導）。 窯業協会雑誌 818</p>	<p><b>この年</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▷ 洋画家 加藤滝野没（明10岡山県生、旧姓山川タキノ）。 京都洋画の発展展目録</li> <li>▷ ケラ美術協会解散。 現代美術の動向展目録 1968</li> <li>▷ 京都産業デザイン研究所、東大路通松原下ルに発足。 デザイン 43</li> <li>▷ パンクラフト会誕生（漆・陶器・ガラス・染織の10名、年令30迄、三木久延ら）。</li> <li>▷ 第1回新象作家協会京都展。 市美術館調書</li> </ul>

参	考	日	本
○第10回日本伝統工芸展陳列作品（京都作家） 陶芸 「壺」保・鑑 石黒宗麿、「ぶどう文壺」岩淵重哉、「三彩釉壺」招 宇野三吾、「青磁花生」宇野宗麿、「油滴天目釉壺」木村盛和、「矢透釉壺」木村盛康、「壺」近藤潤、「染付絵がわり皿」鑑 近藤悠三、「鉄釉ニ彩鉢揃」鑑 清水卯一、「染付金彩扇形瓶」鈴木清、「鉢」原清、「香合」ダウグ=ローリー。 染色 「冬山型染訪問着」伊砂久二雄、「着物五彩の影」上野清二、「絞り染訪問着隅田川」小倉建亮、「着尺格子」尾崎良三、「簾」河上峰仙、「上代袖訪問着・無限」羽田登喜男、「上代訪問着・奏原」鑑 森口華弘、「訪問着・趣」吉田弘 漆芸 「耀貝螺鈿・飾筐」鑑 黒田辰秋 人形 「桐塑布貼・おどり」大林蘇乃、「桐塑紙貼彩色・孫」河野良子、「紙張子・雷神」鑑 平中歳子 その他 「截金六華文飾篁」招 斉田梅亭 同展目録	<p>注 保……重要無形文化財保持者 鑑……鑑査会鑑査委員 招……招持者</p>	<p>3・一 エジプト展、東京国立博物館に開催。 4・一 ビュッフェ展、近代美術館に開催。 4・一 ドイツ表現派展、西武に開催。 5・10～30 第7回日本国際美術展（オノサトトシブ「相似」、吾妻兼治郎「MUS99」、シンキチタジリ「歩哨」、工藤甲人「枯葉」、川端実「作品」など）。 6・一 川端電子記念館開館。 7・1～9・30 世界近代彫刻シンポジウム、真鶴海岸に開催、野外で制作、展示。 8・一 マイヨール展、西洋美術館に開館。 9・10～11・5 第1回全国野外彫刻コンクール展、宇部市野外彫刻美術館に開催（清水晴児、小田裏、田中栄作ら受賞）。 9・22～10・10 第27回新制作協会展（山本丘人「異郷落日」など）。 10・12～30 第31回独立展（野口弥太郎「セビラの行列」、海老原「雨の日」）。 10・一 ジャガール展、西洋美術館に開館。 10・一 日本古美術展、仏国パリに開催。 11・1 第6回日展（高山辰雄「夜」）。</p>	<p><b>この年</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▷ 昭37年度朝日賞受賞者、坂本繁二郎。</li> <li>▷ 昭37年度芸術選奨受賞者、麻生三郎（油絵）・山田喆（陶磁）。</li> <li>▷ 昭37年度日本芸術院賞、恩賜賞 河村蜻山（工芸・陶磁）、芸術院賞 奥田元宋（日本画）、山田申吾（日本画）、田村一男（洋画）、中村琢二（洋画）、大内青圃（彫刻）、中川清（彫刻）、番浦省吾（工芸・漆）、森野嘉光（工芸・陶磁）、山崎節堂（書）。</li> <li>▷ 全国商業美術家連盟結成。</li> </ul>

京	都	府
1・26～3・15	インド古代美術展、日本新聞社主催で市美術館に開催（彫刻を中心とし、インダス文明遺品・陶器・貨幣・絵画の240点を展示）。市美術館と美術品、日本美術年鑑 昭39	12・8 陶芸家 河合瑞豊没（大2生、名喜太郎）市美術館年報 昭39
2・1～3・1	近代日本の洋画と工芸——明治・大正期——（昭和期は3・3～3・29 近代美術館に開催。なおこの年現代国際陶芸展・禅の美術・現代イギリス彫刻展・ピカソ展・児島善三郎遺作展なども同館で開く）。国立近代美術館京都分館年報 昭39	12・17 日本画家 板倉星光没（明28京都生）。京都年鑑 昭41
3・11～13	第1回染色家グループ蒼蛙展、府ギャラリーに開催（伊藤逸平ら）。府ギャラリーニュース 32	12・25 京都タワービル完成（景観が問題となる）。京都 12・25
3・一	第1回日本デザイン学生会議、京都会館に開催。デザイン 60	この年 ▷ 染織家 山田久蔵没（明13生）。京都の美術工芸100年展目録
4・4～5・10	現代美術の動向——絵画と彫塑——、国立近代美術館京都分館に開催（絶えず既成の形式の打破と個性的なイメージの発掘をめざし、きわめて複雑多様な様相を呈している現代美術のなかから、最近1年間に、とくに新鮮な仕事を発表した作家の近作を展示、以後毎年定期的に開催を決定）。国立近代美術館京都分館年報 昭39	
5・21～6・25	ミロのビーナス特別公開、市美術館に開催（観覧人員は東京展をしのぐ89万人余、1点の異例の展覧会）。市美術館年報 昭39	
6・一	市立美大教授佐和隆研、元井能・野崎一良・田村隆照らとインドネシア美術工芸調査に出発（8月帰国）。市立美術大学研究紀要 1964・10	
7・28	漆工家 堂本漆軒没（明22・11・3 京都生、名五三良、享年74）。日本美術年鑑 昭40	
8・11～9・20	浅井忠の芸術、国立近代美術館京都分館に開催（油絵・水彩約50点、ほかに日本画・素描・彫塑・陶器・漆器・染織・尺牘・画稿など参考品も展示）。同展目録	
8・15	陶芸家 久保駒太郎没（明45香川生）。市美術館年報 昭39	
8・26	洋画家 沢部清五郎没（明17京都生）。同上	
9・17	知事、文化財保護基金制度を提唱。京都 9・18	
10・6～7	テキスタイルデザイン試作展、府ギャラリーに開催（市染織試験場主催）。府ギャラリーニュース 39	
10・27	図案家 中川泰蔵没（明29兵庫生）。市美術館年報 昭39	
10・28～11・1	インドネシア美術資料展、市立美大収蔵庫に開催。同上	
11・一	京都府立総合資料館友の会発足。しりょうかん 1	

参	考	日	本
○第7回日展（京都関係のみ）	文部大臣賞 菁 扁 壺 浅見 隆三（工芸） 菊 華 賞 瀬 沢野 文臣（日本画） “ 創 生 小林 尚珉（工芸） 特 選 近江余呉湖 宇田 裕彦（日本画） “ 池 河合 健二（ “ ） “ 出雲の村 水田 慶泉（ “ ） “ 涼 木 安田 友彦（工芸） “ 風 伯 西川 実（ “ ） “ 秋立つ頃 渋谷 和子（ “ ） 市美術館年報 昭39	4・16 洋画家 小杉放庵没（明14生、享年82）。	
○第28回新制作協会展（日本画京都関係のみ）	「大洋」奥村厚一、「舞妓」石木正、「母と子」 広田多津、「少女」秋野不矩、「冠鶴」上村松篁、 「瑠璃光」・「瑠璃光石」向井久万、「海蝕」沢宏 靱、「足跡」菊池隆志、「溱」麻田隆司 日本美術年鑑 昭40	4・18 彫刻家 朝倉文夫没（明16生、享年81）。	
		4・一 現代イギリス彫刻展、ブリヂストン美術館に開催。	
		4・一 ミロのビーナス展、西洋美術館に開催。	
		4・一 ロシア秘宝展、東京国立博物館に開催。	
		5・9～30 第6回現代日本美術展（志水晴児「浸蝕—4」、猪熊弦一郎「Entrance A」、向井良吉「勝利者の椅子」）。	
		6・19 第32回ベニス ビエンナーレ国際美術展に堂本尚郎入賞。	
		8・2 長岡現代美術館開館。	
		8・5 自由美術家協会の麻生三郎、糸園和三郎、末松正樹ら脱退。9月、一部は主体美術協会結成。	
		9・8 洋画家 中沢弘光没（明7生、享年90）。	
		10・26 前田青邨、日光二荒山神社壁画「山霊感応」完成、奉献式。	
		この年 ▷ 昭38年度毎日芸術賞受賞者、野口弥太郎。 ▷ 昭38年度朝日文化賞受賞者、伊藤蕪朔。 ▷ 昭38年度芸術選奨受賞者、海老原喜之助、（洋画）。	
		▷ 昭38年度日本芸術院賞受賞者、恩賜賞 中川紀元（洋画）、芸術院賞 山本丘人（日本画）・岡鹿之助（洋画）・辻光典（工芸・漆芸）。	



京 都 府	この年
1・16 日本画家 都路華明没(明36京都生)。 京都年鑑 昭41	▷ 新しい画廊が多数誕生しグループ展・個展 が隆盛(京都画廊連盟加盟数は35軒で1昨年より 10軒以上増加)。 京都 12・24
1・一 アヅマギャラリー、下京区寺町仏光寺 下ルに開く。 京都 12・4	▷ 京都産業会館竣工し、京都染織会館ここに 移転。 京都の美術工芸100年展目録
3・26 袋師10代土田友湖没(明37・12生、享 年61)。 表千家	
6・12 市美術館、第1回美術入門講座を開く (初歩的な美術入門講座として、スライドによる 美術講座を春秋の2期、毎土曜日4日間の日程で 開講)。 市美術館年報 昭40	
8・15 市立美大助教授木村重信、アフリカロ ーデシア地方石造美術調査、ブッシュマン生態調 査に出張(11月迄)。 市立美術大学研究紀要 1963・11	
10・1 協同組合クラデタム京都(Craft De- sign Team Kyoto=CRADETAM Kyoto) 発 足(京焼の窯元と作家・デザイン批評家らが新製 品の開拓をめざして)。 デザイン 83	
11・3~28 市美術館主催の「京都洋画の発展」 展を、同館に開催(京都洋画の先駆者田村宗立・ 浅井忠から梅原龍三郎・安井曾太郎・黒田重太郎 をへて小牧源太郎に至る61名の作家の作品183点 を陳列、明治以後の洋画興隆の遠景となった近世 の洋風画や関係資料もあわせて展示)。 毎日 11・4、市美術館年報 昭40	
11・5 京都府教育委員会・京都府文化財保護 基金(財)、府立総合資料館講堂に文化財関係者協 議会を開催、席上文化財保護に功績のあった16名 を文化財功労者として表彰する(蜷川知事をはじめ 府下各市町村の文化財担当者、保存会などの関 係団体、民俗資料関係者など約400名が出席、被 表彰者は堀井正雄・山下虎二郎・宇佐美直八・高 宮正信・上田信雄・山口光園・井上伝四郎・藤田 幸太郎・人見立一・中山修一・川上重蔵・柴田仲 右衛門・杉山信三・吉田直敏・菊入頼如)。 京都 11・5	
11・30~12・5 皆川月華染彩展、大丸に開催 (四曲や二曲屏風・額・きものを額装したものな ど22点を展示)。 京都 12・4	
11・一 新四条大橋高欄完成(デザイン田村浩)。 デザイン 82	
12・10~12 第1回主体美術京都展、府ギャラ リーに開催。 府ギャラリーニュース 51	
12・17~1・30 具象絵画の新たな展開展、 国立近代美術館京都分館に開催。 同展目録	
12・18~1・26 第18回日展(市美術館) <sup>(1)</sup> 。	
12・22 日本画家 田之口青晃没。 京都年鑑 昭42	

参 考	日 本
(1)第8回日展 受賞者(京都関係のみ) 菊華賞 池田 道夫(日本画)「黒い卓上」 〃 東端 真作(工芸)「光 棍」 特選 大塚 明(日本画)「妙 義」 〃 浜田 昇児(〃)「御 岳」 〃 山岸 純(〃)「石 段」 〃 小川 立夫(〃)「庭」 〃 寺石 正作(工芸)「屋久島風景」 〃 伊東 奎(〃)「蒼 容」 〃 森岡 峻山(書)「一 片 秋」 市美術館年報 昭40	1・一 『SD(スペースデザイン)』創刊。 3・一 在欧日本人美術展、ローマ日本文化会 館に開催(荻須・長谷川潔・吾妻兼治郎ら、10・ 15~11・28在外日本作家展、近代美術館に開催)。 5・10~30 第8回日本国際美術展(片岡球子 「火山」、近藤弘明「寂光」、白髪一雄「丹赤」、 岡部繁夫「作品UZ」、加納光於「MIRROR 33」、木村賢太郎「七つの餅」、井上武吉「糰65」)。 6・16 第6回リュブリアナ国際版画展に、池 田満寿夫、長谷川彰一入賞。 8・18 図案家 杉浦非水没(明9生、享年89)。 9・2 第8回サンパウロ・ビエンナーレで、 菅井汲、洋画部門で最優秀賞。 9・28、29 第1回日本インダストリアル・デ ザイン会議、東京文化会館に開催。10・4日本サ イン・デザイナー協会第1回シンポジウム。 9・一 第4回パリ青年美術家ビエンナーレ国 際美術展で森省一郎入賞。 9・一 ツタンカーメン展、東京国立博物館に 開催。 9・一 院展芸術の歩み、近代美術館、松坂屋 に開催。 9・一 フォーブ60年展、高島屋に開催。 10・1~31 第1回現代日本彫刻展、宇部市野 外彫刻美術館に開催(江口週「砂上櫓」、桜井祐 一「あるポーズ」、土谷武「作品65—3」、小田裏 「一週間」ほか)。 10・一 黒田清輝生誕100年記念展、ブリダ ストン美術館に開催。 10・一 ルオー遺作展、西洋美術館に開催。 11・12~17 ペルソナ展、松屋に開催(粟津潔 ・福田繁雄・田中一光、宇野亜喜良・横尾忠則ら グラフィックデザイナーの近作展)。
	この年 ▷ 昭39年度毎日芸術賞受賞者、加藤唐九郎。 ▷ 昭39年度芸術選受賞者、高山辰雄(日)。 ▷ 昭39年度日本芸術院賞受賞者、麻田辨次 (日)、浜田観(日)、吉井淳二(洋)、高橋節郎 (工)、日比野五鳳(書)。

京	都	府
<p>1・8～17 第1回クラデタム京都展、紅画廊に開催。 デザイン 83</p> <p>2・1～6・1 八ピキの梟展、画廊紅に開催(石原薫・不動茂弥・下村良之介・辻晋堂・熊倉順吉・鈴木治・八木一夫〔不出品〕・佐野猛夫ら思い思いの版画を展示)。 京都 2・5</p> <p>3・1～27 現代ヨーロッパのリビングアート展、国立近代美術館京都分館に開催。 同展目録</p> <p>3・16 学識者 中井宗太郎没(明12・9・19京都生、享年87)。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>3・1 昭42春ワシントンに誕生するケネディホールに寄贈される京都西陣の緞帳「飛躍の花」4月末、完成の見通しとなる(緞帳の寄贈は日米協会を中心に検討の結果決定し、報告をうけた西陣織物工業組合どん帳委員会が、北区衣笠東御所内町の佐々木多次郎織物工場にその製作を依頼したもの、図案は京都市染織試験場志村光広技師のデザイン、製作費総額3,500万円)。 京都 3・11</p> <p>4・5～5・5 稲垣稔次郎展、国立近代美術館京都分館に開催(衣裳、染布、紙地型染・淡彩・素描などを展示)。 同展目録</p> <p>4・21 染織家 小合友之助没(明31・3・28京都生、享年68)。 日本美術年鑑 昭42、市美術館年報 昭41</p> <p>4・1 陶芸家 新井謹也没(明17・7・31三重県生、陶号 陶房、孚鮮陶画房、享年81)。 京都工芸大観、市美術館年報 昭41</p> <p>5・1～15 画廊紅の選抜シリーズ第1回展開催(美学者や美術評論家の1人1人が選考にあたるという新企画の選抜シリーズをはじめ。第1回展の選者は上野照夫)。 京都 5・14</p> <p>5・1～16 彫刻二人展、東京日本橋の秋山画廊に開催(京都在住の抽象彫刻家山崎脩・宮永理吉の2人、鉄彫刻の山崎は二紀会委員、陶彫の宮永は行動美術会員で、ともにゼロの会に所属しながらユニークな彫刻を発表)。 同上</p> <p>6・22～24 中川泰蔵遺作展、府ギャラリーに開催(皿・花器などの遺作を展示)。 京都 6・18</p> <p>8・4～7 第1回京都竹芸家クラブ展、府ギャラリーに開催。 府ギャラリーニュース 61</p> <p>9・22～10・10 第30回新制作協会展。「壁」秋野不矩、「湖北」麻田鷹司、「樹下幽禽」上村松篁、「ものみな虚空しく」向井久万、「潮音」奥村厚一、「踊」広田多津、「亀裂」・「岩紋」沢宏鞆、「舞妓」石本正 日本美術年鑑 昭42</p> <p>9・28～29 第2回日本インダストリアルデザイナー協会年次大会、京都国際会議場に開催。 デザイン 91</p>	<p>10・1 堂本美術館竣工。 京都画壇</p> <p>11・13～12・11 GLインテリア発足、第1回「あかり」展を開催(前半、多田美波展、後半、作家合同展)。 デザイン 94</p> <p>11・18 陶芸家 河井寛次郎没(明23・8・24鳥根県生、享年76、紫野大徳寺山内真珠庵に葬る)。 日本美術年鑑 昭42、市美術館年報 昭41</p> <p>この年</p> <p>▷ 番浦省吾、四天王寺から依頼の壁画を完成(昭36暮以来、「釈迦と十六弟子」・「山越えの阿弥陀図」など4面)。 京都 4・6</p> <p>▷ 浅見隆三、中国へ出発。 京都 8・30</p> <p>▷ 京都市工芸指導所、南区西九条南田町に移転、京都工業試験所として再発足。 京都の美術工芸100年展目録</p> <p>▷ 現代工芸美術家協会京都、社団法人として設立。 市美術館調査</p>	

参	考	日	本
○現代美術の動向展 開催趣旨	現代の美術は、いまだかつて例をみないほどめまぐるしい変転と脱皮を重ね、多彩きわまる複雑な様相を呈しております。旺盛な創造の意欲に燃えるこんにちの若い作家たちは、絶えず既成のイメージを否定して、未知の領域の発掘に挑み、大胆な造形の実験をくりかえしているのであって、その多様な動きは、一定の流派や傾向で律することができないばかりではなく、従来の美術という観念から、逸脱するものさえ少なくありません。当館では、現在の美術界の尖端にあらわれているこのような動向を、つねに新しい状況において把握し、その断面を集約的にあきらかにするために、毎年「現代美術の動向」と題する展覧会を開いてまいりました。今回の動向展はその第5回目に当たります。	1・1 17世紀ヨーロッパ名画展、東京国立博物館に開催。	1・18 陶芸家 河村喜太郎、鎌倉で没(明32京都生、河村蜻山の弟、享年66)。 日本美術年鑑 昭42
本年は、ここ1年間ほどのあいだに、きわだって新鮮な仕事を発表し、注目すべき成果をあげた気鋭の作家を、当館の責任において選び、その最近の作品を展示しました。出品者のほとんどは、20代ないし30代の若い世代に属し、作家としての経歴もさほどながくはありません。したがってかならずしもすべてが安定した技術や練達の表現力を有しているとはいえませんが、しかし過去の固定的な形式や素材にとらわれることなく、さまざまな方法もちいて、個性の自由な発現をめざしております。この若々しい活力が、現代日本の美術を押し進めるのに大きく作用していることを、率直に認めるべきでしょう。	このたびの展覧会にみられる顕著な特長のひとつは、絵画とも彫刻ともいえないような、新しいオブジェ的な作品がいくつかあらわれていることです。作者は、絵画や彫刻というジャンルの枠にしがたって制作しようとは、もともとかがえていないのであって、現代の尖鋭な造形の意志の前には、このような分類は、しだいに便宜的な意味しかもたなくなってきたようです。また記号やパターンを反覆して視覚の直接的な印象にうったえるオブ・アート風の表現、あるいは金属や樹脂などの新しい素材を効果的に使用し、無機的な材質感を強調した作品も目立っております。	4・10 日本画家 川端龍子没(明18生、享年80)。	4・10 洋画家 山下新太郎没(明14生、享年84)。
数多くの作家のおびただしい作品のなかから、本当に現代を代表するにたる創意にみちたものを取り出すことは、はなはだ困難な仕事といわなければなりません。ここでは美術界における作家の地位や経歴などを一切顧慮せず、むしろできるだけ新人を積極的に選ぶことに留意しました。かつてこの展覧会で取りあげた作家も含まれていますが、それはこれらのひとつとが、以前よりもさらに大きな前進をしめしているとかがえたからです。ともかくこの展覧会によって、東京と京都を中心としたこんにちのもっとも新しい美術の大勢が、ほぼ概観できることとおもいます。	このたびの展覧会にみられる顕著な特長のひとつは、絵画とも彫刻ともいえないような、新しいオブジェ的な作品がいくつかあらわれていることです。作者は、絵画や彫刻というジャンルの枠にしがたって制作しようとは、もともとかがえていないのであって、現代の尖鋭な造形の意志の前には、このような分類は、しだいに便宜的な意味しかもたなくなってきたようです。また記号やパターンを反覆して視覚の直接的な印象にうったえるオブ・アート風の表現、あるいは金属や樹脂などの新しい素材を効果的に使用し、無機的な材質感を強調した作品も目立っております。	5・10～30 第7回現代日本美術展(桂ユキ子「ゴンベとカラス」、鶴岡政男「視点B」、建昌覚造「Organ No.12」など)。	5・10～30 第7回現代日本美術展(桂ユキ子「ゴンベとカラス」、鶴岡政男「視点B」、建昌覚造「Organ No.12」など)。
昭和41年5月	現代美術の動向展目録 1966	6・1 近代日本洋画の150年展、鎌倉近代美術館に開館。	6・17 第33回ベニス・ビエンナーレ国際美術展で池田満寿夫最高賞。
		7・1 岸田劉生展、近代美術館に開催。	7・1 岸田劉生展、近代美術館に開催。
		7・1 ロダン展、西洋美術館に開催。	7・1 山種美術館開館。
		7・1 山種美術館開館。	10・1 江戸美術展、東京国立博物館に開催。
		10・1 現代アメリカ絵画展、近代美術館に開催。	10・1 現代アメリカ絵画展、近代美術館に開催。
		10・1 ソ連国立美術館近代名画展、西洋美術館に開催。	10・1 ソ連国立美術館近代名画展、西洋美術館に開催。
		11・11～17 「空間から環境へ」展、松屋に開催(滝口修造・東野芳明・巖嘔・高松次郎・永井一正・大辻清司・奈良原一高・磯崎新・一柳慧ら前衛芸術家の総合展)。	11・11～17 「空間から環境へ」展、松屋に開催(滝口修造・東野芳明・巖嘔・高松次郎・永井一正・大辻清司・奈良原一高・磯崎新・一柳慧ら前衛芸術家の総合展)。
		この年	この年
		▷ 昭40年度芸術選奨受賞者、菅井 汲。	▷ 昭40年度日本芸術院賞受賞者、恩賜賞 池部鈞、芸術院賞 中村貞以(日)、山本倉丘(日)、井手宣通(洋)、円鋳勝三(彫)、藤野舜正(彫)、帖佐美行(工)、青山杉雨(書)。
		○第9回日展受賞者	○第9回日展受賞者
		文部大臣賞 岸田 竹史(工芸)「陽 映」	文部大臣賞 岸田 竹史(工芸)「陽 映」
		菊 華 賞 山岸 純(日本画)「晨」	菊 華 賞 山岸 純(日本画)「晨」
		特 選 谷口 良三(工芸)「碧 象」	特 選 谷口 良三(工芸)「碧 象」
		川島 浩(日本画)「湖」	川島 浩(日本画)「湖」
		大日躬世子( )「舞 扇」	大日躬世子( )「舞 扇」
		野々内良樹( )「シャボテン」	野々内良樹( )「シャボテン」
		森野 泰明(工芸)「花 器(藍)」	森野 泰明(工芸)「花 器(藍)」
		伊藤 裕司( )「刻 象」	伊藤 裕司( )「刻 象」
		宮崎 芳郎( )「積」	宮崎 芳郎( )「積」
		上松 義山(書)「秋 天 高」	上松 義山(書)「秋 天 高」
		市美術館年報 昭41	市美術館年報 昭41

京	都	府
<p>1・5 洋画家 伊庭伝次郎没(明34滋賀県生、享年65)。日本美術年鑑 昭41、市美術館年報 昭41</p> <p>1・18 山田新一、フランス政府から芸術および文学騎士十字勲章を受ける。 京都 1・15</p> <p>1・16～22 New Year 16 Works, ギャラリー16に開催(上野照夫京大教授、吉岡健二郎同志社大助教授、中村敬治同講師、乾由明国立近代美術館技官が選考委員で、各作家2人を選出。1作家2点の合計16点を展示)。 京都 1・21</p> <p>2・28～3・26 現代アメリカのリビングアート展、国立近代美術館京都分館に開催。 同展目録</p> <p>2・一 アヅマギャラリー賞選考委員決定(近代美術館京都分館乾由明、大阪芸大森啓、小牧源太郎の3人。同賞は同画廊で1年間に開いた個展を対象に優秀作家を選出する)。 京都 2・11</p> <p>3・1～30 府立総合資料館で、河井寛次郎コレクション約300点を出品し民芸展を催す(木喰人作仏像、奥羽・丹波・山陰地方の家具・日用品が中心)。 同展目録、朝日 2・28</p> <p>3・6～12 実験版画展、ギャラリーココに開催(ヨシダミノル、井田照一、森口宏ら6人、プラスチック・ステンレスの素材、プラネタリウム形式など多彩)。 京都 3・11</p> <p>3・17～20 第1回全国女流陶芸公募展、女流陶芸・毎日新聞社共催で府ギャラリーに開催。 毎日 3・1</p> <p>3・一 第2回ジャパン アート フェスティバル出品作家に京都から石本正・上原卓・大野淑嵩(以上絵画)、向井良吉(彫刻)、吉原英雄(版画)、清水六兵衛・近藤悠三・浅見隆三・叶光夫・八木一夫・鈴木治・今井政之(陶芸)、岡田章人(漆芸)、黒田辰秋(木工)、志村ふくみ(染織)ら約30人が選ばれる。 京都 3・8</p> <p>4・6 昭41年度芸術院賞に、京都から上村松篁、浅見隆三「爽」(第9回日展出品作)が選ばれる。 日本美術年鑑 昭43</p> <p>4・10 京都から、森口華弘が友禅染で無形重要文化財に選ばれる(蒔糊技法を併用した友禅染が得意)。 京都 3・29、日本美術年鑑 昭42</p> <p>4・一 竹久夢二展、市美術館に開催(200数十点の遺作・遺品を陳列)。 日本美術年鑑 昭43</p> <p>4・一 京都国立博物館に無料休憩所が完成(設計:関口鏡太郎京大名誉教授) 京都 3・26</p> <p>4・29 故橋本閑雪邸白沙村荘、15年振りに一般公開される。 京都 4・20</p> <p>5・20 陶芸家 浅見五郎助没(明28・7・27生、享年71)。 京都工芸大観、京都 5・21</p>	<p>5・20 蓮実重康、京都新聞ホールで開かれた美術史学会公開講演会で「ほんものとしせもの」と題し講演(ニセモノが横行する社会風潮を背景に、鑑定のみずかしさなどについて発言)。 京都 5・26</p> <p>5・一 河井寛次郎遺作展、東京・大阪両高島屋に開催(6月大原美術館に開催)。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>6・1 国立近代美術館京都分館、独立して京都国立近代美術館となる(同時に、友の会を運営、美術館ニュース『視る』を発刊)。 京都国立近代美術館年報 昭42</p> <p>8・1 陶芸家 河村蜻山没(明23・8・1京都生、名半次郎、享年77)。 日本美術年鑑 昭43、京都工芸大観、京都 8・2</p> <p>8・17 文学博士新村出没(明9・10・4山口生、享年90)。 日本美術年鑑 昭43</p> <p>8・19～9・7 異色の近代画家たち展、京都国立近代美術館に開催(村山槐多・船川未乾・長谷川利行ら)。 同展目録</p> <p>8・一 清水の陶芸家河島浩三ら10人、自由な土地でのびのびと好きな陶器を量産しようと、宇治宇山間部の炭山地区に疎開を決定(昭43・10 協同組合炭山工芸村の標柱を立てる)。 京都 昭44・1・1</p> <p>8・一 京大70年史編さんのため資料を求めていた同大学の倉庫から須田国太郎の絵「出陣学徒壮行」が発見される。 京都 8・4</p> <p>9・2～5 第1回新陶人展、府ギャラリーに開催。 府ギャラリーニュース 74</p> <p>9・9～24 西陣500年記念 西陣の歴史展、京都国立博物館に開催(14世紀の「舞楽装束襦袢紺地牡丹唐草文金襴」をはじめ、明治時代までの染織品・関連資料など212点を展示、空曳機の実演も)。 同展目録</p> <p>9・9～10・10 明治初期の洋風陶磁器展、府立総合資料館に開催(府所蔵の染付洋食器31種、265点を展示)。 京都 9・7</p> <p>9・23～10・22 近代日本の工芸展、京都国立近代美術館に開催(工芸ジャンルにおけるわが国初の近代の総合的な工芸史を展開)。 同展目録</p> <p>9・一 京都から4作家が万国博の野外造形美術制作者として選ばれる〔福島敬泰・榊健(北白川美術村)、ヨシダミノル(東京ビエンナーレ賞受賞)、寺尾恍示)。 京都 9・30</p> <p>10・6 陶芸家 鈴木清没(明36・9・12京都生、享年64)。 日本美術年鑑 昭43、京都 10・7</p> <p>10・8～12 伊庭伝治郎遺作展、府ギャラリー</p>	

参	考	日	本
<p>○第10回日展 文部大臣賞 叶 光夫(工芸)「懸垂瓶」 菊華賞 河合 健二(日本画)「霞沢岳」 特選 梶 喜一(日本画)「游影」 三輪 晃久( ) 「川」 山崎 忠明( ) 「薬師寺の塔」 宇田 裕彦( ) 「竹生島」 小島 清雄(洋画)「ぎおん」 松木為佐視(工芸)「創生」 鈴木 健司( ) 「白珠」 市美術館年報 昭42</p> <p>○第31回新制作協会展(日本画京都関係のみ) 「横臥舞妓」石本正、「苦力」秋野不矩、「朝」上村松篁、「擬容」向井久万、「仲間」広田多津、「茫涯」麻田鷹司、「水光」奥村厚一、「礁壁」沢宏毅、「秋吉台」菊池隆志 日本美術年鑑 昭43</p>	<p>に開催(「大崎風景」・「雉」・「静物」など30点)。 府ギャラリーニュース 75、京都 10・7</p> <p>10・8 湯浅コレクション 丹波布、潮画廊で初公開。 京都 10・8</p> <p>10・29～11・26 京都の美術工芸100年展、市美術館に開催。 同展目録</p> <p>11・6 第14回日展の文部大臣賞に、京都から下保昭(日本画家、作品「遙」)、叶光夫(陶芸家作品「懸垂瓶」)が選ばれる。 京都 11・7</p> <p>11・8 染色家 中川華邨没(明15・9・8京都生、名福之助、享年85)。 市美術館年報 昭42</p> <p>11・24 デザイナー重成基没(明34・9・12台湾キールン生、享年66)。 同上</p> <p>11・25～29 第1回京都洋画新人展、府ギャラリーに開催(府主催井田照一・石原薫ら)。 府ギャラリーニュース 76</p> <p>11・30 京都から彫刻家松田尚之、日本芸術院新会員に選ばれる。 京都 12・1</p>	<p>2・9 洋画家 田中佐一郎、東京で没(明33・10・24京都生、享年66)。</p> <p>3・4～3・14 第4回国際青年美術家展、西武に開催、日米より93点入選、前田奔入賞。</p> <p>3・31 舞台装置家 伊藤巖湖没(明32生、享年67)。</p> <p>3・一 ユトリロ展、東京セントラル美術館に開催。</p> <p>4・一 グラフィックアートUSA、近代美術館に開催。</p> <p>4・一 ポンペイ古代美術展、西洋美術館に開催。</p> <p>4・一 メソポタミア展、東京国立博物館に開催。</p> <p>4・一 藤島武二生誕100年記念展、ブリグストン美術館に開催。</p> <p>5・2～30 第9回日本国際美術展(吉原治良「白い円」、高松次郎「世界の壁」、三木富雄「巨大な耳」、荒川修作「Alphabet skin No.3」など)。</p> <p>5・一 近代日本の版画展、近代美術館に開催。</p> <p>8・22 洋画家 和田三造、東京で没(明16兵庫県生、享年84)。</p> <p>10・一 近世洋風画名作展、神奈川県立博物館に開催。</p> <p>10・一 ソ連50年展、近代美術館に開催。</p>	<p>この年</p> <p>▷ 昭41年度毎日芸術賞受賞者、岡田謙三。</p> <p>▷ 昭41年度(第17回)芸術選奨受賞者、池田満寿夫(版画)・赤地友哉(漆芸)。</p> <p>▷ 昭41年度日本芸術院賞受賞者、上村松篁(日)、佐藤太清(日)、島村三七雄(洋)、浅見隆三(陶芸)、金子鷗亭(書)。</p> <p>▷ 明治時代の油絵が、はじめて重要文化財に指定される(高橋由一「鮭」、浅井忠「収穫」、青木繁「海の幸」)。</p>
<p>この年</p> <p>▷ 亀井玄兵衛・佐々木邦彦、この年春結成の東方美術協会に参加(佐々木はこの年暮れに脱退)。 京都画壇</p> <p>▷ 近藤悠三、イランの古陶村ラレーズを訪問。 京都 昭43・9・27</p>			

京	都	府
1・11～28	第1回青銅会、朝日会館ホールに開催（関西在住の日展系彫刻家12人により設立、彫刻作品を生活に結びつけ、公共の広場・街頭の空間に作品を提供することを計画、代表吉田敬示）。 京都 1・27	年に完成。 京都 5・7
2・10～3・17	明治美術展、市美術館に開催（市・京都新聞社共催、竹内栖風「ヴェニス」の月」、菱田春草「落葉」、橋本雅邦「竹林猫図」、田村宗立「少女図」、岸井堂「東山全景図」、森寛齋「羅浮仙人図」、フォンタネージ「夕陽」、幸野樸嶺「百福図」、山元春拳「法麿一掃」、橋本閑雪「群猿」、浅井忠「グレーの秋」など）。 同展目録	5・15 京都光風会創設20周年記念祝賀パーティー、京都タワーホテルに挙行。 京都 5・16
2・15～18	第16回あすなる展（府ギャラリー、昭10生以前の会員は退き若手で再スタート）。	5・21 第1回京都デザイン会議、現代デザインと京都というメインテーマで京都会館に開催（主催、京都デザイン協会）。 デザイン 112
2・24～3・24	現代陶芸の新世代展、京都国立近代美術館に開催（熊倉順吉・清水卯一・鈴木治・谷口良三・八木一夫・山田光など）。 同展目録	5・1～26 第1回京都染織研究会展、朝日会館ホールで開催。 5・1 平安博物館、旧日銀京都支店に開館（財団法人古代学協会）。 京都 昭44・9・26
3・12～17	近藤悠三作陶展、高島屋に開催、（中近東の陶芸村を訪ね、トルコ・ペルシャ陶器の研究をしてきた帰国第1回発表展）。	6・3 陶芸家 石黒宗磨没（明26・4・14富山県新湊生、号翔菴、享年75）。 市美術館年報 昭43
3・1～31	第28回美術文化展、15年振りに京都（市美術館）に開催。 京都 3・30	6・1 行動美術会員の京都在住彫刻家富樫実、ポーランドのクラコウで開かれる「国際版画ビエンナーレ」の招待出品者に選ばれる。 京都 6・14
3・30～4・5	田中佐一郎遺作展、市美術館に開催。 同上	7・3 漆芸家 久保金平没（明35・12・15大津坂本生、享年65）。 市美術館年報 昭43
4・1～13	楠部弥次作陶50年展、市美術館に開催。 同展目録	8・15 洋画家 高林和作没（明33・4・12大阪界生、享年68、法然院に葬る）。 同上
4・9	漆芸家 岡田章人没（明43・6・17香川県生、享年58）。 市美術館年報 昭43	8・26～9・1 可能性の実験展、ギャラリー16に開催（寺尾悦示・松本正司・矢野正治ら、環境芸術展は11・25～12・1にもトランスフォーム展として開く）。 京都 12・28
4・12	河井寛次郎の遺作約400点を、京都国立近代美術館へ、故人の友人である財団法人日本色彩研究所理事川勝堅一から寄贈。これらは川勝コレクションとして同館に保存・展示される。 京都 4・12	9・28～11・3 陶工 河井寛次郎遺作展、京都国立近代美術館に開催（同館へ寄贈の418点）。 京都国立近代美術館年報 昭43
4・21	土田麦穂の「舞妓林泉」が切手趣味週間の記念切手となる。 京都 4・22	10・1～30 京都野外彫刻展、京都会館東小公園に開催（心ないいたずらの続出で作品がこわされる）。 京都 10・12
4・23～5・5	第20回京展、 <sup>(1)</sup> 市美術館に開催。 同展目録	10・30 府立文化芸術会館、河原町広小路に起工。 府政だより 157
5・7	一流日本画家の手で進められている、新宮殿を飾る壁画・屏風・襖絵等の中で、上村松篁の第三休所第四休所の間切りに置かれる「日本の花」・「日本の鳥」の二枚の屏風絵、六月に完成の予定。 龍村美術織物の大広間を飾るつづれ織の壁張り地「海浜と北山杉をテーマにした四季の移り変りを抽象的に描いたもの」は2月にすでに完成。また川島織物製の食堂三方の壁面を占める中村岳陵のえがく「夕焼雲」が、原図となったものは昨	11・11～25 三人展（津田青楓・小川千甕・武野小路実篤の近作展）、鉄斎画廊に開催。 京都 11・22
		11・26～29 第1回京都彫刻新人展、府ギャラリーに開催（府主催）。 府ギャラリーニュース 88
		12・15～1・7 第11回日展 <sup>(2)</sup> （市美術館）。
		12・27 ロートレックの名画「マルセル」、京都国立近代美術館から盗まれる（ロートレック展開催期間中）。 京都 12・28

京	都	府	参	考
12・11	府工芸美術総合研究委員会（会長蛸川知事）、6部会の今年度研究テーマを決め、研究試作に乗り出す。 京都 12・8		(1)第20回京展 審査員 一部（日本画） 池田 逢邨 宇田 裕彦 大塚 明 奥村 厚一 小野 竹喬 梶原緋佐子 金島 桂華 下保 昭 河合 健二 徳岡 神泉 堂本 印象 浜田 観 山口 華陽 山本 倉丘 二部（洋画） 伊谷 賢蔵 伊藤久三郎 伊東 俊平 今井 憲一 岩崎又二郎 金田 辰弘 川端弥之助 斎藤 真成 芝田 耕 高林 和作 田中勇次郎 津田 周平 吉村 勲 山里 明 二部（版画） 洋画の審査員ならびに古野由男 三部（彫塑） 岡本 庄三 杉村 尚 辻 晋堂 藤庭 賢一 堀内 正和 松田 尚之 矢野 判三 四部（工芸） 市川 通三 伊東 琴壺 今井 政之 加藤 宗巖 楠部 弥次 清水六兵衛 久保 金平 小山 喜平 鈴木 健司 高橋 完次 谷口 良三 中堂 憲一 番浦 省吾 平山 歳子 皆川 泰蔵 山鹿 清華 五部（書） 浅井 素堂 上松 義山 加藤 紫山 谷辺 橘南 中野 越南 日比野五鳳 森岡 峻山 森田 緑山 各部 井島 勉 市美術館年報 昭43	
		○意匠部会：二酒袋を使った札入れ、和紙を使った木製手さげ、清水焼の手法と技術を駆使した陶鈴など。 ○金工部：北山杉、おおみずなぎでりなど府のシンボルをあしらった飾りザラ、一輪ざし、ペーパーナイフ。 ○陶磁器部会：夜久野町、舞鶴地区の陶土を生かした飾りつば、額、各種サラなど。 ○漆器部会：京北町産出の木地を利用した盆類の開発。 ○木工工部会：新建築様式と生活様式にマッチした試作品。 ○諸工芸部会：黒谷和紙のショッピングバッグなど万国博の内外人を対象にした京都色豊かな新製品。 京都 12・8		
		この年 ▷ 吉原英雄、第6回東京国際版画ビエンナーレで文部大臣賞を受賞（作品「シーソーユ」）。 同展目録 ▷ 三尾公三、第3回ジャパン・アート・フェスティバルで文部大臣賞受賞。 現代美術の動向展目録 1968		
		▷ アート・ポスター、若者の間にブームをおこす。 京都 4・22 ▷ 昭43年度の府の作品買上げ実績は日本画総合展で20点、200万円・洋画3点、30万円。彫刻40万円、工芸品150万円。仏像彫刻1点、10万円 朝日ホール瓦版 6		
		▷ 京都の作家数 日本画家 700人 洋画家 200人 彫塑家 100人 工芸家 500人 （各団体会員とアウサイダーを含む） 府美術工芸課調べ		
		▷ 『京都府文化財図録』完成（府政百年記念事業、3年計画、3,000部、1,200万円）。 府決算報告 昭43		
		(2)第11回日展 1. 審査員 日本画 宇田 荻邨 西山 英雄 下保 昭 曲子 光男 山岸 純 彫塑 杉村 尚 工芸 山鹿 清華 清水六兵衛 番浦 省吾 春日井秀雄 中堂 憲一 宮下 善寿 森野 泰明 書 日比野五鳳 2. 受賞者 菊華賞「貴船の森」宇田 裕彦（日本画） 〃 「昇る太陽」岩沢 重夫（〃） 〃 「宴」河合 誓徳（工芸） 〃 「緑蔭」下川 千秋（〃） 〃 「北辺」福本 達雄（〃） 〃 「燦光」伊藤 裕司（工芸） 特選「火口原」石川 義（日本画） 〃 「燦」山崎 昭（〃） 市美術館年報 昭43		